

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

**平成23年度～平成27年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究成果報告書概要**

1 学校法人名 学校法人東洋大学 2 大学名 東洋大学

3 研究組織名 国際哲学研究センター

4 プロジェクト所在地 東京都文京区白山 5-28-20 東洋大学白山キャンパス 6号館 4階

5 研究プロジェクト名 国際哲学研究センターの形成——多元化した地球社会における新たな哲学の構築

6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
村上 勝三	文学研究科	教授

8 プロジェクト参加研究者数 63 名

9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
村上 勝三	文学研究科・教授	東西哲学・宗教を貫く世界哲学の方法論研究	世界哲学における方法論構築
相楽 勉	文学研究科・教授	近現代日本の哲学研究	近現代日本における哲学の研究基盤形成
渡辺 章悟	文学研究科・教授	大乘仏教における共生思想研究	大乘仏教における共生思想の解明
小路口 聡	文学研究科・教授	近現代日本の倫理思想研究	近現代日本における倫理思想の研究基盤形成
三浦 節夫	ライフデザイン学部・教授	井上円了の行動と思想の研究	明治期の哲学思想の形成の解明
長島 隆	文学研究科・教授	18-20 世紀ドイツ自然観再検討	ドイツ哲学における共生思想基盤の構築
永井 晋	文学研究科・教授	フランス哲学と自然神秘主義の研究	フランス哲学における共生思想の解明
岩井 昌悟	文学部・准教授	明治期の仏教哲学研究	明治期の仏教哲学の研究基盤形成
沼田 一郎	文学部・教授	インド法制思想の方法論研究	インド法制思想の方法論解明
坂井 多穂子	文学部・准教授	中国古典における制作方法論の研究	中国文学における方法論解明
竹村 牧男	文学研究科・教授	井上円了の哲学・思想の研究	明治期の哲学と教育理念の解明

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

伊吹 敦	文学研究科・教授	近現代における「仏教学」の形成過程に関する研究	仏教学の性格と形成過程の解明
野間 信幸	文学研究科・教授	中国思想における方法論研究	中国思想における方法論解明
河本 英夫	文学研究科・教授	哲学における体系(システム)の可能性	哲学での方法の境界の吟味
清水 高志	総合情報学部・准教授	方法論としての創造的モナドロジー研究	現代哲学における方法論構築
大野 岳史	文学部・助教	西洋中世・近世哲学における著述と論証の研究	西洋中世・近世哲学における方法論解明
山口 しのぶ	文学研究科・教授	ネパール仏教における共生思想研究	ネパール仏教における共生思想解明
橋本 泰元	文学研究科・教授	インド思想・宗教の共生思想研究	インドにおける共生思想の解明
渡辺 章悟	文学研究科・教授	大乘仏教における共生思想研究	大乘仏教における共生思想の解明
朝倉 輝一	法学部・准教授	討議理論と生命倫理研究	ドイツを中心とする現代思想における共生思想基盤構築
菊地 章太	ライフデザイン学部・教授	儒教・道教の共生思想研究	東アジアにおける共生思想の解明
曾田 長人	経済学部・教授	ドイツにおける人文主義の思想研究	ヘレニズム・ヘブライズムの共生伝統の解明
ライナ・シュルツァ	テュービンゲン大学・研究員	井上円了の哲学の研究	明治初期の哲学的精神の解明
黒田 昭信	ストラスブール大学・准教授	生命の哲学の方法論的研究	日仏近現代哲学における方法論解明
武内 大	東洋大学・非常勤講師	幻想的イメージに関する方法論研究	無意識研究の方法論解明
大西 克智	熊本大学・准教授	西洋古代～近世における自由意志論の研究	自由という観念の基盤に関する方法論解明
ゲレオン・コプフ	ルーター大学・准教授	明治時代における仏教哲学	近代への仏教思想的応答についての考察
ケネス・田中	武蔵野大学・教授	アメリカ仏教の研究	アメリカの宗教における多文化共生の解明
村松 聡	早稲田大学・教授	コミュニタリアニズムを中心とした応用倫理学	伝統および共同体と現代との共生
小野 純一	東洋大学・非常勤講師	イスラーム哲学と神秘主義の研究	イスラーム哲学における共生思想の解明
稲垣 諭	自治医科大学・教授	西欧における研究情報集積の研究	哲学情報集積のシステム構築
呉 震	復旦大学哲学学院・教授	中日近世における儒学の伝統と展望	グローバル時代における儒学の役割を考える
フレデリック・ジラル	フランス極東学院・教授	近代哲学概念論	明治時代と明治以前の哲学語彙の形成の解明

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

渡辺 博之	東洋大学・非常勤講師	西洋近世における感情・情念の研究	現代における感情概念考察のための基礎的研究
斎藤 明	東京大学・教授	インド中観思想史上の共生思想研究	インド中観思想史における共生思想の解明
バイカル	桜美林大学・准教授	モンゴルの神仏習合—オボの信仰を例として—	モンゴル仏教における共生思想の解明
井上 忠男	日本赤十字国際人道研究センター長	グローバルな多文化共生社会の普遍的価値としての人道思想の研究	グローバルな多文化共生社会の普遍的価値としての人道思想の解明
佐藤 厚	専修大学・特任教授	井上円了における哲学と宗教	明治初期における哲学と宗教のあり方およびその関連
小坂 国継	日本大学・教授	明治思想史の研究	日本型観念論の形成史とその特質の解明
山口 祐弘	元東京理科大学・教授	ドイツ古典哲学の課題と方法	現代文明における哲学の必要と意義の考察
山口 一郎	東洋大学・客員教授	現代ヨーロッパ哲学の現象学的方法論研究	西欧哲学における方法論解明
吉田 公平	東洋大学・名誉教授	哲学館・東洋大学に関わる哲学者研究	哲学館・東洋大学の哲学伝統の解明
出野 尚紀	東洋大学東洋学研究所客員研究員	井上円了における哲学思想の民衆伝達	明治期の民衆への哲学的啓蒙の解明
石田 安実	お茶の水女子大学グローバル人材育成推進センター特任准教授	心身関係ならびに「自律性」「主観性」の哲学倫理学的研究	自然と人間の共生、そのあり方と原理の解明
岡田 正彦	天理大学教授	井上円了と「哲学宗」	近代国家形成期における日本の宗教・倫理思想の考察
鎌田 東二	京都大学こころの未来研究センター教授	共生思想としての神仏習合/神道の研究	日本の生存哲学の解明
西村 玲	公益財団法人中村元東方研究所・専任研究員	日本・中国近世における仏教思想の展開と影響	近世（15～19世紀）の日中仏教思想と近代仏教・哲学への影響
マルクス・ガブリエル	ボン大学教授	哲学的対話とグローバルな共生の研究	哲学的対話とグローバルな共生の解明
アグスティン・ハシント＝サバラ	ミチョアカン大学院大学教授	井上円了と西田幾太郎に於ける修身と倫理学	1894－1919年の日本に於ける徳育理念のあり方

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

宮本 久義	東洋大学・ 文学研究科 客員教授	多文化共生社会の思想基盤研 究	アジアにおける共生思想 基盤の構築
武藤 伸司	東京女子体 育大学・体 育学科講師	自然科学に対する哲学的方法 論研究	自然科学に対する哲学的 基礎づけ

＜研究者の変更状況(研究代表者を含む)＞

着任

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
井上円了の行動と思想の研究	東洋大学ライフデザ イン学部・教授	三浦 節夫	明治期の哲学思想の形 成の解明
近現代における「仏教学」の 形成過程に関する研究	東洋大学文学研究 科・教授	伊吹 敦	仏教学の性格と形成過 程の解明
方法論としての創造的モナ ドロジー研究	東洋大学総合情報学 部・准教授	清水 高志	現代哲学における方法 論構築
討議理論と生命倫理研究	東洋大学法学部・准教 授	朝倉 輝一	ドイツを中心とする現 代思想における共生思 想基盤構築
儒教・道教の共生思想研究	東洋大学ライフデザ イン学部・教授	菊地 章太	東アジアにおける共生 思想の解明
井上円了の哲学の研究	井上円了記念学術セ ンター・客員研究員	ライナ・シ ュルツァ	明治初期の哲学的精神 の解明
生命の哲学の方法論的研究	セルジー＝ポントワ ーズ大学・准教授	黒田 昭信	日仏近現代哲学におけ る方法論解明
幻想的イメージに関する方 法論研究	東洋大学・非常勤講師	武内 大	無意識研究の方法論解 明
西洋古代～近世における自 由意志論の研究	埼玉大学他・非常勤講 師	大西 克智	自由という観念の基盤 に関する方法論解明
明治時代における仏教哲学	ルーター大学・准教授	グレオン・ コプフ	近代への仏教思想的応 答についての考察
西田幾多郎を中心とした近 代日本哲学	東洋大学国際哲学研 究センター・研究助手	白井 雅人	明治期の日本の哲学の 解明
仏教における共生思想研究	東洋大学国際哲学研 究センター・研究助手	堀内 俊郎	仏教における共生思想 の解明

(変更の時期:平成 23 年 7 月 1 日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
アメリカ仏教の研究	武蔵野大学・教授	ケネス・田 中	アメリカの宗教におけ る多文化共生の解明

(変更の時期:平成 24 年 2 月 1 日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
コミュニタリアニズムを中 心とした応用倫理学	早稲田大学・准教授	村松 聡	伝統および共同体と現 代との共生
イスラーム哲学と神秘主義 の研究	ベルギー・ゲント大 学・臨時講師	小野 純一	イスラーム哲学におけ る共生思想の解明

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

(変更の時期:平成 24年 3月 1日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
レヴィナス哲学研究	東洋大学国際哲学研究センター・研究助手	渡名喜 庸哲	現代的課題に対する哲学的方法論構築

(変更の時期:平成 24年 4月 1日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
中日近世における儒学の伝統と展望	復旦大学哲学学院・教授	呉 震	グローバル時代における儒学の役割を考える

(変更の時期:平成 24年 4月 6日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
近代哲学概念論	フランス極東学院・教授	フレデリック・ジラル	明治時代と明治以前の哲学語彙の形成の解明
西洋近世における感情・情念の研究	東洋大学・非常勤講師	渡辺 博之	現代における感情概念考察のための基礎的研究

(変更の時期:平成 24年 5月 1日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
現代ドイツ環境哲学研究	広島大学・教授	山内 廣隆	現代ドイツ環境哲学解明

(変更の時期:平成 24年 5月 15日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
ドイツにおける人文主義の思想研究	東洋大学経済学部・教授	曾田 長人	ヘレニズム・ヘブライズムの共生伝統の解明

(変更の時期:平成 24年 6月 1日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
インド中観思想史上の共生思想研究	東京大学・教授	斎藤 明	インド中観思想史における共生思想の解明

(変更の時期:平成 24年 7月 1日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
モンゴルの神仏習合ーオボーの信仰を例としてー	桜美林大学・准教授	バイカル	モンゴル仏教における共生思想の解明
グローバルな多文化共生社会の普遍的価値としての人道思想の研究	日本赤十字秋田看護大学・教授	井上 忠男	グローバルな多文化共生社会の普遍的価値としての人道思想の解明

(変更の時期:平成 24年 7月 20日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
井上円了における哲学と宗教	東洋大学他・非常勤講師	佐藤 厚	明治初期における哲学と宗教のあり方、および

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

			その関連
--	--	--	------

(変更の時期:平成 24 年 8 月 1 日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
明治思想史の研究	日本大学・教授	小坂 国継	日本型観念論の形成史とその特質の解明
美学、芸術学、環境芸術およびロマン主義美学研究	富山大学・准教授	伊東 多佳子	自然と人間の共生、その表現形態の解明

(変更の時期:平成 24 年 11 月 1 日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
ドイツ古典哲学の課題と方法	元東京理科大学・教授	山口 祐弘	現代文明における哲学の必要と意義の考察

(変更の時期:平成 25 年 3 月 15 日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
知識の創造と継承の担い手としての高等教育の現状と将来像	大学評価・学位授与機構・教授	土屋 俊	21 世紀における大学の可能な存立形態の解明
哲学における体系(システム)の可能性	東洋大学文学部・教授	河本 英夫	哲学での方法の境界の吟味

(変更の時期:平成 25 年 4 月 1 日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
インド思想における世界構造の方法論的研究	東洋大学国際哲学研究センター・研究助手	三澤 祐嗣	インド思想における人間観と宇宙論の解明

(変更の時期:平成 27 年 4 月 1 日)

退任

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
禅・浄土教・耶蘇教—明治の宗教と救済思想に関する研究	九州大学・准教授	ジェームズ・バスキン ンド	明治期の比較宗教論・救済観の研究基盤形成

(変更の時期:平成 25 年 3 月 31 日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
レヴィナス哲学研究	東洋大学国際哲学研究センター・研究助手	渡名喜 庸哲	現代的課題に対する哲学的方法論構築

(変更の時期:平成 26 年 3 月 31 日)

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
共生社会システム構築における自然科学の役割	東洋大学国際哲学研究センター研究支援者 (PD)	山村 陽子	共生社会システム構築における自然科学の役割の解明

(変更の時期:平成 27 年 3 月 31 日)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

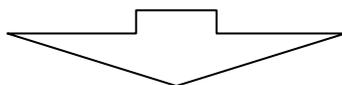
プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
日本・中国近世における仏教思想の展開と影響	公益財団法人中村元 東方研究所・専任研究員	西村 玲	近世(15~19世紀)の日 中仏教思想と近代仏 教・哲学への影響

(変更の時期:平成 28年 2月 2日)

変更
旧

プロジェクト外での研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
西欧における研究情報集積 の研究	東洋大学文学部・助教	稲垣 論	哲学情報集積のシステ ム構築

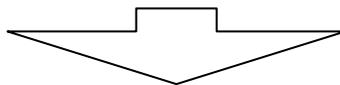
(変更の時期:平成 24年 4月 1日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・ 職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東洋大学文学部・助教	東洋大学・研究支援者	稲垣 論	哲学情報集積のシステ ム構築

(変更の時期:平成 25年 4月 1日)



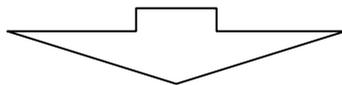
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・ 職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東洋大学・研究支援者	自治医科大学・教授	稲垣 論	哲学情報集積のシステ ム構築

旧

プロジェクト外での研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
西洋中世・近世哲学における 著述と論証の研究	東洋大学国際哲学研 究センター・研究助手	大野 岳史	西洋中世・近世哲学にお ける方法論解明

(変更の時期:平成 24年 4月 1日)



新

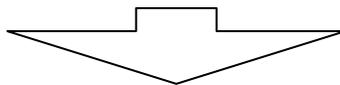
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・ 職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
国際哲学研究センター・研究 助手	東洋大学文学部・助教	大野 岳史	西洋中世・近世哲学にお ける方法論解明

旧

プロジェクト外での研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
現代ヨーロッパ哲学の現象 学的方法論研究	東洋大学文学部・教授	山口 一郎	西欧哲学における方法 論解明

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

(変更の時期:平成 25 年 4 月 1 日)



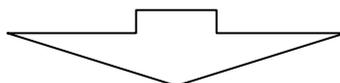
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東洋大学・教授	元東洋大学文学部・教授	山口 一郎	西欧哲学における方法論解明

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
哲学館・東洋大学に関わる哲学者研究	東洋大学文学部・教授	吉田 公平	哲学館・東洋大学の哲学伝統の解明

(変更の時期:平成 25 年 4 月 1 日)



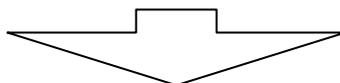
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東洋大学・教授	元東洋大学文学部・教授	吉田 公平	哲学館・東洋大学の哲学伝統の解明

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
自然科学に対する哲学的方法論研究	東洋大学国際哲学研究センター研究助手	武藤 伸司	自然科学に対する哲学的基礎づけ

(変更の時期:平成 27 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東洋大学国際哲学研究センター研究助手	東京女子体育大学・体育学科講師	武藤 伸司	自然科学に対する哲学的基礎づけ

11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

【目的・意義】

地球社会のグローバル化が進み、多様な価値観が喧伝されて、未来の方向性を失い混迷を深めている現代社会にあって、人間と社会のあり方を根源から考察する哲学の役割はますます重要となっている。この時機にあたり、東洋大学の建学の理念に基づき伝統を形成してきた東西の哲学研究の総力をあげて、国際社会の動向の中で地球社会の適切な進路を見出すべく問題解決型の哲学研究を推進し、時代にふさわしい、しかも未来を見据えた新たな思想を提供する。

以下の3つの研究ユニットを設置し、哲学研究の国際的拠点形成する。

①井上円了及び近代日本の哲学研究ユニットである第1ユニットは、東洋大学の創業者であり近代日本における重要な思想家である井上円了(1858年～1919年)を中心に、近代日本にお

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

る西洋哲学の受容、仏教や儒教の伝統の連続性と変革の解明を具体的な研究課題とする。その際、ウェスタン・インパクトを受け、伝統的価値観と普遍的価値観との衝突の中で、日本人はどのような哲学研究を行ってきたのかをあらためて検証し、その全貌を明かすとともに、今日のグローバル時代を生き抜いていく哲学のあり方に資する事績を見出し収集する。

②東西哲学・宗教を貫く世界哲学の方法論研究ユニットである第2ユニットは、さまざまな立脚点を統括的に論じうる議論の場・ロゴスの場を形成するために、諸外国の哲学・宗教研究者と不断に討論のできる仕組みの構築を目指す。

③多文化共生社会の思想基盤研究ユニットである第3ユニットは、今日の多元化社会における、異文化・異宗教間や人間と環境の間、世代間等のさまざまな局面における共生を実現する、より現実的・具体的な思想と制度設計理論を究明する。この歴史的・地理的・文化的諸問題の分析・究明を、国内外の研究者の協働において遂行する。特に、イランとの文化交流、異民族・異宗教間の共生、自然や伝統との共生を具体的な課題とし、現地調査も含めた研究活動を行う。

【計画の概要】

国際的なネットワークを形成するための最初の段階として、国内外の研究者に客員研究員就任を依頼し、研究体制の整備・構築を行う。

ユニットごとの研究会、ワークショップ、シンポジウムに加え、センター全体でも、3ユニット合同のシンポジウム、年一回の総会を開催する。毎月の運営委員会やユニット会議により、研究進捗状況や予算使用の点検を行う。海外から研究者招聘も行い、共同研究を行うだけでなく、教育活動にも活用する。また、海外に赴いての研究集会、現地調査も行い、研究者・研究機関との連携を深めていく。これらの活動を通じ、国際的な哲学研究のネットワーク作りを行う。

その研究成果を、年次研究年報（英・独・仏など多言語）、ニューズレター（日・英2カ国語）の公刊により開示する。ホームページにも研究活動報告や研究会動画などのデータを充実させ、社会に成果を広く還元する。最終的には各ユニットから市販の書籍を刊行し、研究成果を江湖に問う。

(2) 研究組織

研究組織：センター長（1）、副センター長（2）、センター研究員（24、センター長・副センター長を含む）、客員研究員（33）、研究助手（3）、リサーチアシスタント（2）

事務部門：東洋大学研究推進部研究推進課

本プロジェクトの研究組織は、3つのユニットからなる。ユニット間の横断的な研究も行っているが、本プロジェクトとしての特色は共同研究というよりもむしろ3ユニットそれぞれの特色を活かしながら有機的連関のもとに研究活動をしている点にある。すなわち、各ユニットそれぞれにアメリカ、フランス、ドイツ、メキシコ、中国、イギリス、オーストラリア、ブータン、イランなどの研究者と共同研究を行い緊密な研究協力体制をもっているが、これら相互の活動を交差させ知的資産を持ち寄りながらそれぞれの活動を支え合っている。このように、本プロジェクトの研究組織は国際的ネットワークを作成し、それを現実に動かす態勢を整えている。

センター長はプロジェクト全体の進捗状況を把握し、目的達成に向けてプロジェクトを統括する。副センター長はプロジェクトマネージャーとして各ユニット間の調整や、会計管理を行う。

研究助手、研究支援者（PD）を雇用し、プロジェクトの研究の手助けと事務局運営を担当とする。大学院博士後期課程の学生をリサーチアシスタント（PRA）として雇用し、研究補助に当たらせる。なお、研究の進捗状況や予算執行状況のフィードバックは、毎月行う運営委員会、各ユニットのユニット会議、適宜行う事務局会議、年一回行う外部者も含めた有識者から構成される評価委員会で行い、適切かつ確実な遂行を担保する。

(3) 研究施設・設備等

本プロジェクトでは、東洋大学白山キャンパス6号館に、センター研究室を2部屋設置し、プロジェクトの実施に必要なパソコン、大型プリンタ、図書等を設置し、研究助手、PD、PRAなどを常駐させている。これにより、センターの運営、小規模の会議、資料の作成などが効率的に行うことができるようになっている。設備利用時間は、週5日各平均7時間である。

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

(4) 研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

(1) 哲学の国際化・グローバル化に関する全体シンポジウムの開催

グローバル化の中で未来の方向性を失い混迷を極めている現代社会のなかで、哲学の観点から人間や社会のあり方を根源から考察し、地球社会の適切な進路を見出すべく問題解決型の哲学研究を推進することが本センターの設立目的の一つであった。それを果たすべく、センター全体としては、「哲学の国際化」を統一テーマとし、「哲学の国際化は可能か」(2011年度)*1、「グローバルな現実に向きあう哲学」(2012年度)*2、「国際化とは何をする事なのか～東洋大学国際哲学研究センターの「これまでとこれから」～」(2014年度)*3と題する全体シンポジウムを開催し、各ユニットを中心とした国内外の研究者が研究成果を持ち寄り、討論を行い、問題意識を深めていった。その結果、国際化やグローバル化といっても土着性なしの世界化であるグローバリズムではなく、文化の違いを土台にしながら、それぞれの文化が個性を保ちながら交流すること、すなわち、自分達自身の文化に根づいた国際化が必要であるという視点を現代社会に対して発信しえたという点が、大きな成果であった。

そして、2015年10月に「22世紀の世界哲学に向けて」と題する国際シンポジウム*4を開催し、この5年の議論の総まとめと22世紀の世界哲学構築に向けた新たな提言を行った。

(2) 第1ユニット：近代日本の哲学、特に井上円了の哲学の国際的な研究と発信

第1ユニットは、井上円了の思想を中心とした近代日本哲学の解明を中心的な課題に掲げ、その国際的な研究と発信を目指してきた。そのため、2014年3月末までに、明治期の思想家をテーマにした研究会・ワークショップを計22回開催した*5。これらの研究活動の成果をもとに、2014年4月より連続研究会「明治期における人間観と世界観」という連続研究会を計10回開催した*6。この研究会を通じて、江戸期の先進性と明治期の革新性を明らかにすることができた。この研究成果は市販の書籍『近代化と伝統の間—明治期の人間観と世界観』*7にまとめられ、1月末に刊行された。

また、東アジアにおける近代仏教の問題を国際的な視点で解明するために、韓国・東国大学校と研究協定を結び、共同セミナーを日本で計2回*8開催し、韓国でも計2回目のセミナー*9を開催した。協定により国際的な研究ネットワーク基盤が形成され、グローバルな視野に立った東アジア思想研究が推進された。

さらに日本とフランス・ストラスブール大学をWEBで結んで開催されたWEB講演会*10は、ストラスブール大学の正規の授業の一環として行われた。講演による国際的な研究の発信であるとともに、WEBを使用した国際的な連携の中で教育活動を行う実践となった。

その他、国際学会（於香港）での井上円了についてのパネルセッションの開催*11、井上円了データベースの作成*12など、国内外への情報発信に努めた。

また、第1ユニットの研究活動の一環としてセンター内に国際井上円了学会を設立し、計4回の学術大会*13を開催した。ドイツ、アメリカ、中国、メキシコから研究者を招き、シンポジウムや招待講演を行った。また、日本、アメリカ、ドイツ、スイスの研究者が発表する研究発表も行った。さらに、フランス、アメリカ、ハンガリーで海外研究集会を開催し、国際的な研究体制の構築を目指した。これらの成果は、オンラインジャーナル『国際井上円了研究』1～4号*14に掲載され、日本語と英語の二言語で全世界に向けて公開されている。

これまでの研究で達成された大きな点として、国際井上円了学会の設立とそれによる国際的なネットワークの構築とその運営、東国大学校との研究協定、WEBを使用した国際的な教育活動の実践が挙げられる。こうした活動により、国際的な研究と教育の基盤が構築された。

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

(3) 第2ユニット：東西哲学を貫く方法論に関する研究ならびに実践的課題としての「ポスト福島哲学」研究

第2ユニットは、普遍性と個別性という2つのアプローチから、東西哲学・宗教を貫く世界哲学の方法論研究という課題に取り組んできた。それらは3つの研究に集約される。

(a) 方法論研究 方法論研究は3つに分類される。①哲学を中心とする個別専攻領域における方法論についての研究（研究会）は、理論的基盤を担うものである。それぞれの個別研究から普遍性へのアプローチが行われ、普遍方法論として「比較」、「類似」、「一般化」、「仮説設定」、「抽象」、「観察」、「枚举」、「合致」、「調和」、「類比」（アナロジー）などの分析方法を提起した。研究は25回に上り*15、方法論という大きなテーマの元、様々な議論の場を提供し続けてきたことこそに大きな意義がある。②哲学的基本概念と立場についての国際的共有（WEB 国際会議）は、物質的基盤を担うものである。①の研究により学問研究における独創性の源は研究者の個性に存することが明らかになり、より実践的な方法として開催されたのである。日本を含む二拠点もしくは三拠点をインターネットでつなぎ、同時通訳・逐次通訳を活用し、直接的な議論を交わした。あらゆる場所の制約を超えて行われる不断の哲学議論の場を提供し、大きな成功を収めた。WEB 国際会議は計4回行われた*16が、この方法論は第1ユニットや「ポスト福島哲学」の講演会においても活用された。③異なる領域の研究を横断的に捉えて共有する方法として、クロスセクションの技法*17の開発を行った。普遍的方法論の開発は、有機的なネットワークと新たな学問体系を形作ることができるが、その第1歩として、中国文学、インド哲学、西洋哲学をモデルケースとした近接領域での議論の場を持った。他領域との連携により、互いに欠如していることを補い合い、方法の安定性と論理的妥当性を担保することが可能となるのである。これら3つの成果は、市販の書籍『越境する哲学—体系と方法を求めて』としてまとめられ、11月に刊行された*18。

(b) ポスト福島哲学=来たるべきフクシマの哲学 2011年3月の東日本大震災とりわけ東京電力福島第一原子力発電所の過酷事故により我々を取り巻く環境は一変してしまった。すなわち、目に見ることも、嗅ぐことも、聞くこともできない危機に対して我々がどう立ち向かっていくのか、そしてそれらを哲学的にどのように考えていくのかという新たな課題に立ち向かっていかなければならないということことである。そこで第2ユニットが主体となり、「ポスト福島哲学」というテーマのもとに、WEB 国際会議や国内外の研究者および実践に携わる関係者を招いた研究会等、継続的な研究を計17回に渡って行ってきた*19。研究者らがそれぞれの知を持ち寄り、議論するだけでなく、実践に携わる関係者を招いての研究会を行い、我々が直面している事態の深刻さが浮き彫りになると共に、哲学の研究者と実践活動家たちが互いに協力して努力しなければならないということが明確になった。そして、具体的な提言を行うだけでなく、実践活動の成果、問題点を受け取りながら、哲学的議論を行い、それを実践活動にフィードバックして活かすという問題解決型の実践的哲学の構築を行ってきたことが、この研究の大きな成果である。すなわち、「ポスト福島哲学」とは、哲学的方法論を具体的な実践に適用させた理論と実践の往復運動なのである。そして、これらの成果は市販の書籍『ポストフクシマの哲学—原発のない世界のために』としてまとめられ、8月に刊行された*20。

(c) 〈法〉概念研究 〈法〉概念研究は、その普遍性と多様性という点から、方法論研究にとって重要な位置を占めるものである。この研究は、2011年度のインド古代法の研究*21からスタートした。2011年度には、〈法〉そのものの形態と機能の諸相を時間的・空間的に広くとらえて提示することを課題とし、第1回シンポジウム*22が開催された。そこでは、古代ギリシア、イスラーム、インド、中国、そして仏教思想における〈法〉概念が具体的な事例によって示さ

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

れ、相互の理解を深めることができた。2015年度の第2回目*23では〈法〉の動的なありかたに着目し、社会の近代化と法の変容を問題とした。異なる法系が継受され、変容・定着するプロセスを東欧、アジア、南米の事例に探り、それらを抽象的に理論化する研究がなされた。方法論を個別課題へと適用させたものである「法」概念の研究は、時代、地域、そして研究分野を越えた議論の場を作り、多角的な方法論の展開を切り拓いたのである。そしてこれらの成果は『国際哲学研究』別冊2、4および総括として『国際哲学研究』5号*24にまとめられた。

(4) 第3ユニット：多文化共生に関する研究会、海外研究集会、国際シンポジウムの開催。

多文化共生社会の思想基盤研究を行う第3ユニットでは、文献研究と国内外での実地調査の両面から、多文化社会の現状把握と多文化「共生」社会へ向けての課題や問題点を浮き彫りにし、新たな哲学の構築へ向けての提言を行ってきた。

(a) 「イラン・イスラームとの対話」と題するイランとの共同研究を行った。2012年度はイランから4名の宗教者・哲学者、国内から5名の研究者を招き、国際シンポジウム*25を開催した。翌年はわれわれの側からイラン・アカデミーサイエンスを訪問し、東洋と西洋の概念の再検討を課題とするシンポジウム*26を開催した。2014年度は特に井筒俊彦の共生哲学をテーマとし、イランから4名の宗教者・哲学者を招き、国際シンポジウム*27を開催した。平成27年度もイランを訪問し、イランと日本における哲学の将来についてのシンポジウム*28を開催した。それにより、従来の西洋/東洋という対立枠を解体し、それらを媒介するものとしてのイランという新しい視座から、共生思想への提言を行うことができた。

(b) 「宗教間の共生は可能か」をテーマとし、キリスト教、仏教、神道、修験道、ヒンドゥー教、ジャイナ教の複数の研究者が提題をする研究会・シンポジウムを25回開催した*29。特に、各宗教に通底するものとしての「瞑想」という方法にも着目し、心身の健康や共生に対する瞑想という平和的手段の効果や意義についての研究を蓄積した。

(c) 多文化・多宗教の相剋の実態調査と共生への可能性を探るべく、海外実地調査を行った。昨今「幸福の国」として喧伝されているブータンであるが、メディアで喧伝されているものと異なった実情を実地見聞し、また、現地の高僧と研究集会*30を持つことができた。ミャンマー、タイ、アメリカでは現地の瞑想センターや寺院を調査し、関係者にヒアリング調査を行った*31。

(d) その他、哲学プロパーの観点から、精神と身体の共生、自然との共生、伝統と現代との共生等をテーマとした研究会を16回重ねてきた*32。

特に今まで等閑視されてきたイランとの共同研究は他に類を見ないものであり、その成果は『国際哲学研究別冊』3、7として結実した。日本語、英語、フランス語、ペルシア語の論考とその和訳を含むものである。また、国内外の複数の宗教の研究者が共生に関する問題意識を持ち提言を行ってきたことにより、所期の目的であった多文化共生社会の思想基盤研究の研究拠点としての役割を果たすことができた。

それらの成果は『宗教の壁を乗り越える—多文化共生社会への思想的基盤』として、市販の書籍の形で公刊した*33。

(5) 哲学研究の国際的ネットワークを形成すべく、海外からの研究者招聘、海外へ赴いての共同研究・研究集会、インターネット上での国際会議・講演会を実施した。

国内外で計64名の研究者との共同研究を行い、研究会やシンポジウム、研究情報の交換などを行った。これにより、本センターの設立目的の一つであった「哲学研究の国際的なネットワークの形成」、「国内外の哲学研究者が協働して研究できる体制」の実現を果たすことができた。

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

共同研究を行った研究者は以下の通りである。

【平成 23 年度】

- ・ゲオルグ・シュテンガー（オーストリア：ウィーン大学）：11 月招聘、第 2 ユニットを中心に現象学と間文化哲学の方法論に関する共同研究。
- ・黒田昭信（客員研究員）：フランスから 2 月に招聘、第 1 ユニットと第 2 ユニットを中心に西田哲学と井上円了および方法論に関する共同研究。
- ・ドゥニ・カンブシュネル（仏：パリ第一大学）、ゲオルグ・シュテンガー（オーストリア：ウィーン大学）：10 月 15 日、WEB 国際会議「普遍方法論の可能性——デカルトとフッサール——」へ参加。
- ・ジャン＝リュック・ナンシー（仏：ストラスブール大学名誉教授）、ベルンハルト・ヴァルデンフェルス（独：元ボーフム大学）：12 月 17 日、第 2 ユニット WEB 国際講演会「ポスト福島哲学 知の巨匠に尋ねる」へ参加。

【平成 24 年度】

- ・ゲレオン・コプフ（客員研究員）：7 月招聘、第 1 ユニットを中心に明治期の日本哲学と西田哲学、井上円了に関する共同研究。
- ・ジャン＝ピエール・デュピュイ（米：スタンフォード大学）：7 月招聘、第 2 ユニットを中心にポスト福島哲学に関する共同研究。
- ・ジャヤンドラ・ソーニー（オーストリア：インスブルック大学）：9・10 月招聘、第 3 ユニットを中心にインド哲学、ジャイナ教、共生思想に関する共同研究。
- ・エティンヌ・タッサン（仏：パリ第七大学）：9 月招聘、第 2 ユニットを中心にポスト福島哲学と間文化哲学に関する共同研究。
- ・呉震（客員研究員）：9 月招聘、第 1 ユニットを中心に明治期の日本哲学と中国思想に関する共同研究。
- ・呉光輝（中国：廈門大学外文学院）：12 月招聘、第 1 ユニットを中心に中国と日本の近代哲学に関する共同研究。
- ・市川義則（仏：パリ国際大学都市日本館図書室）、エディ・デュフルモン（仏：ボルドー第三大学）、フレデリック・ジラルール（客員研究員）、黒田昭信（客員研究員）：フランスで開催された国際井上円了学会アルザス研究集会「井上円了とその時代」（仏・欧州日本学研究所）に参加。
- ・ジョスラン・ブノワ（仏：パリ第一大学）、黒田昭信（客員研究員）、ゲオルグ・シュテンガー（オーストリア：ウィーン大学）：日本、フランス、オーストリアを結んでの第 2 ユニット WEB 国際会議「哲学の方法としての直観と反省」に参加。
- ・アブドッラヒーム・ギャヴァーヒー（イラン：世界宗教研究センター）、ダヴード・フェイラーヒー（イラン：テヘラン大学）、ビジャン・アブドルカリミー（イラン：イスラーム自由大学）、ハッサン・サイード＝アラブ（イラン：エンサイクロペディア・イスラミカ協会）、ビジャン・アブドルカリミー（イラン：イスラーム・アザド大学）、小野純一（客員研究員）：11 月招聘、第 3 ユニット国際シンポジウム「共生の哲学に向けて—イスラームとの対話—」に参加、イスラーム教、スーフィズム、共生思想に関する共同研究。
- ・ロベン・ソナム・ボンデン（ブータン中央僧院）、ロベン・ゲンボ・ドルジ（ブータン中央僧院）：ブータンにおいて、研究集会へ参加、共生思想に関する共同研究、仏教に関する聞き取り調査。

【平成 25 年度】

- ・呉正嵐（中国：南京大学思想家研究中心）：6 月招聘、第 2 ユニットを中心に中国文学と方法論に関する共同研究。
- ・ジョン・マラルド（米：北フロリダ大学名誉教授）、アグスティン・ハシント・サバラ（メキシコ：ミチョアカン大学院大学）、ウィリアム・ボディフォード（米：カリフォルニア大学ロサンゼルス校）：9 月招聘、国際井上円了学会第 2 回学術大会参加、第 1 ユニットを中心に明治期の日本哲学に関する共同研究。
- ・佐藤将之（国立台湾大学）：12 月招聘、第 1 ユニット中心に井上円了や中国思想に関する共同研究。
- ・フレデリック・ジラルール（客員研究員）：1 月招聘、第 1 ユニットを中心に仏教思想や宗教学、エミル・ギメに関する共同研究。

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

- ・王青（中国社会科学院）：香港で開催された東アジア文化交渉学会において共同のパネル発表。
- ・アグスティン・ハシント・サバラ（メキシコ：ミチョアカン大学院大学）、遊佐道子（米：西ワシントン大学）、カルマンソン・リーア（米：ドレーク大学）、ハーリー・スコット（米：ルーター大学）、ゲレオン・コプフ（客員研究員）：アメリカにおいて、研究集会「井上円了哲学と間文化の哲学」を開催、井上円了に関する共同研究。
- ・シマ・アヴラモヴィッチ（セルビア：ベオグラード大学）、二宮正人（ブラジル：サンパウロ大学）：1月招聘、第2ユニット国際シンポジウム「〈法〉の移転と変容」に参加、〈法〉概念に関する共同研究。
- ・エドゥアール・メール（仏：ストラスブール大学）、ヘレン・ビービー（英：マンチェスター大学）：日本、フランス、イギリスを結んでの第2ユニットWEB国際会議「合理主義者と経験主義者による哲学の方法についての対話」に参加。
- ・マルクス・ガブリエル（独：ボン大学）：12月招聘、第3ユニットを中心に、哲学と宗教、シェリングに関する共同研究。
- ・アジャ・リンポチュ師（チベット：モンゴル仏教文化センター所長）：6月招聘、国際シンポジウム「共生の哲学に向けて一言語を通じて古代アジアの人々の価値観を探る」に参加、第3ユニットを中心に、仏教思想、共生思想に関する共同研究。
- ・ダルユーシュ・シャイエガン、Ayatollah Seyyed Mostafa Mohaghegh Damad, Reza Davari Ardakani, Gholamreza Avani, アブドッラヒーム・ギャヴァーヒー、Bojnurdi, Fato' llah Mujtabai：イランにおいて開催された第3ユニット研究集会「イランと日本の間の思想的共生の必要性」への参加、あるいは共生思想について議論や現代イランにおける学術研究の情報交換など。

【平成 26 年度】

- ・ゲレオン・コプフ（客員研究員）：5月招聘、第1ユニットを中心に明治期の日本哲学に関する共同研究。
- ・ウルリッヒ・ジーク（独：マールブルク大学）：9月招聘、第1ユニットを中心にした日本哲学、井上円了に関する共同研究。
- ・コロマン・ブレンネル（ハンガリー：エトヴェシュ大学）、梅村裕子（ハンガリー：エトヴェシュ大学）、フレデリック・ジラル（客員研究員）、サボー・バラージュ（ハンガリー：エトヴェシュ大学）、エシュバツハ・サボー・ヴィクトリア（独：チュービンゲン大学）、ファルカシュ・イルディコー（ハンガリー：カーロリ大学）、タコー・フェレンツ（ハンガリー：エトヴェシュ大学院生）：ハンガリーにおいて開催された国際井上円了学会ハンガリー研究集会への参加、井上円了に関する共同研究。
- ・鄭承碩（韓国：東国大学校仏教大学）、朴正克（東国大学校仏教大学）、金浩星（東国大学校仏教大学）、姜文善（慧源スニム）（東国大学校仏教大学）、高榮燮（東国大学校仏教大学）：東洋大学国際哲学研究センター・東国大学校仏教大学共同研究「20世紀以後における韓日両国仏教の変遷について」の開催。秋期セミナーは韓国において、春期セミナーは日本において、共同研究を遂行。
- ・ピエール・フランソワ・モロー（フランス高等師範学校リヨン校）：第2ユニットWEB国際会議「理性と経験—スピノザ哲学の方法—」への参加。
- ・アブドッラヒーム・ギャヴァーヒー（元駐日イラン大使、世界宗教センター）、カーゼム・ムーサヴィー・ボジュヌールディー（グレート・イスラミック・エンサイクロペディア・センター）、エフサン・シャリーアティー（イラン・元テヘラン大学）、ナスロッラー・プールジャヴァーディー（イラン・元テヘラン大学）：12月招聘、第3ユニット国際シンポジウム「共生の哲学に向けて：イラン・イスラームとの対話—井筒俊彦の共生哲学—」への参加、共生思想に関する共同研究。
- ・リトガード・ソーニー、ジャヤンドラ・ソーニー：オーストリアにおいて開催された第3ユニット研究集会「多文化共生に向けて—宗教・思想に何ができるか?—」への参加、インド哲学、西洋哲学、共生思想に関する共同研究。

【平成 27 年度】

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

- ・姜文善（慧源スニム）（韓国・東国大学校仏教大学）、金光植（韓国・東国大学校仏教大学、卍海思想研究所）、金浩星（韓国・東国大学校仏教大学）：東洋大学国際哲学研究センター・東国大学校仏教大学共同研究「近代における日韓両国仏教の変遷」春期セミナーの開催。
- ・第3ユニット海外研究「国際サンスクリット学会参加ならびに、タイ・ダンマカーヤとの多文化共生共同研究」：宮本久義（客員研究員）、渡辺章悟（研究員）、堀内俊郎（研究助手）
- ・申緒璐（中国・杭州師範大学）、呉震（客員研究員）、銭明（中国・浙江省社会科学院）：8月招聘、第1ユニットワークショップ「江戸期における漢学者たちの人間観の特色—中国との比較—」への参加、明治期の日本哲学に関する共同研究。
- ・アグスティン・ハシント・サバラ（客員研究員）：9月招聘、国際井上円了学会第4回学術大会への参加、井上円了や教育勅語に関する共同研究。
- ・マルクス・ガブリエル（独：ボン大学）、ハンス・スルガ（米：カリフォルニア大学バークレー）：12月招聘、第3ユニット国際シンポジウム「グローバル化時代の哲学」への参加。

（6）ニューズレター、年次研究報告書、ホームページを通じた研究成果の公表。

上記（1）～（5）の成果概要は、「研究成果を広く国際社会に発信する」という本センターの設立意義を果たすべく、年次研究報告書『国際哲学研究』と別冊に掲載し*34、国内外の関係者や研究機関等に送付してきた。これまでに刊行された報告書は次の通りである。「

- ・『国際哲学研究』1号（2012年3月、総308頁、使用言語：日英仏独）
- ・『国際哲学研究』2号（2013年3月、総389頁、使用言語：日英中仏独）
- ・『国際哲学研究』3号（2014年3月、総368頁、使用言語：日英中仏独ペルシャ）
- ・『国際哲学研究』4号（2015年3月、総380頁、使用言語：日英仏韓）
- ・『国際哲学研究』5号（2016年3月、総398頁、使用言語：日英独仏中韓）
- ・別冊1号『ポスト福島哲学』（2013年3月、総136頁）
- ・別冊2号『〈法〉概念の時間と空間』（2013年3月、総62頁）
- ・別冊3号『共生の哲学に向けて—イスラームとの対話—』（2013年6月、総167頁）
- ・別冊4号『〈法〉の移転と変容』（2014年8月、総109頁）
- ・別冊5号『哲学と宗教—シェリング Weltelteser を基盤として』（2014年10月、総161頁）
- ・別冊6号『共生の哲学に向けて—宗教間の共生の実態と課題』（2015年3月、総89頁）
- ・別冊7号『共生の哲学に向けて—イラン・イスラームとの対話(2)』（2016年2月、総107頁）
- ・別冊8号『デカルトにおける形而上学と道徳』（2016年2月、総112頁）

また本プロジェクトの成果を迅速に公開し周知させるために、定期的にニューズレターを発行するほか、ホームページを活用した成果報告や活動予定等の発信*35も活発に行ってきた。

国際的な発信のために、年次研究報告書は日本語版と外国語版（英・独・仏など多言語）からなり、ニューズレターおよびホームページは日本語・英語の2カ国語で公開している。また、ホームページ内では研究会の動画や、『国際哲学研究』所収の論文の閲覧が可能である。

なお、研究テーマ調書では中間の平成25年度にそれまでの研究成果をまとめた書籍の市販が構想されていたが、実際の研究状況を踏まえ、年次研究報告書および別冊誌、ホームページ等で公開する形態に修正した。書籍の市販は最終年度にまとめて（4冊刊行）行なった。

＜優れた成果があがった点＞

海外から計38名の研究者を招き、哲学研究の国際的研究拠点の役割を果たした。

国際井上円了学会の設立、『国際井上円了研究』の公刊によって、国際的な研究基盤が形成され、国際的な視野で捉えられた井上円了の姿が明らかにされた。具体的には、井上円了が中国の近代化に大きな影響を与えたことや、西洋哲学とは異なる新たな哲学の枠組み構築したこと

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

などが明らかになった。

東国大学校との共同セミナーを通じ、日韓の研究者が協働し、近代東アジアの仏教の様相が明らかにされた。日韓の研究者の相互の視点を持ち寄ることによって、互いに欠けていた観点が発見され、研究が補完されることになった。それにより、従来にはない視点による新たな研究の可能性が深まることとなった。

継続的に WEB 国際会議を開くことにより方法論が蓄積され、インターネットを用いた哲学議論の場を作るという新たなネットワーク形成の道を開いた。

多文化共生の問題を正面から取り上げ、各宗教や哲学思想の数十名の研究者の観点から、現状と課題に関する問題提起や研究成果を得ることができた。その成果は『国際哲学研究』別冊 3、5、6、7 の 4 冊として結実した。

今までの研究成果をまとめ、一般向けの書籍として計 4 冊の刊行を行った。

- ①『近代化と伝統の間—明治期の人間観と世界観』(2016 年 1 月、教育評論社)：連続研究会「明治期における人間観と世界観」を通じて、近世末期の日本の先進性が明らかにされるとともに、明治期に入ってきた西洋哲学が伝統を活性化させながら新たなパラダイムを切り開いたことが明らかにされ、この成果をまとめたもの。
- ②『越境する哲学—体系と方法を求めて』(2015 年 11 月、春風社)：普遍的な方法論の研究成果をまとめたもの。
- ③『ポストフクシマの哲学——原発のない世界のために』(2015 年 8 月、明石書店)：「ポスト福島哲学」の研究成果として、哲学者と実践的活動者の両者からのアプローチが試みられている。
- ④『宗教の壁を乗り越える—多文化共生社会への思想的基盤』(2016 年 1 月、ノンブル社)：多文化共生に関する 5 年の研究成果をとりまとめた書籍。

<課題となった点>

第 1 ユニットは、国際井上円了学会の設立、東国大学校との共同研究、明治期における人間観と世界観の解明とその成果の出版(予定)等を通じて、明治期に近代日本哲学がいかに成立したのかについて大きな研究成果を生み出すことができた。東アジアの哲学として、広い視野から近代日本哲学の展開を研究することによって新たな研究成果が期待されるという見通しが得られたが、成立以後の近代日本哲学の展開に関しては十分に行き届いた研究とはならなかった。

第 2 ユニットに関しては、当初の研究計画では研究・文献情報をインターネット上で共有するサイト構築を掲げていた。しかし、これよりも緊急性の高い 3.11 以降の社会問題に対処するため、これの割合を減少し方法論の適用研究として「ポスト福島哲学」を立ち上げた。当初計画との関係で言えば研究・文献情報として当センターで行なわれた研究成果(動画を含む)を日本語と英語の二カ国語でインターネット上に公表しており、当初計画に近い成果は得られている。また、WEB を用いた議論の場の設定やクロスセクションの技法の開発など、具体的な方法論の開発を行ってきたが、これらの継続という大きな課題が残されている。方法論の発展にとって大きな課題となろう。また、WEB 国際会議を通じ、翻訳という大きな問題が浮き彫りとなった。そこで翻訳の問題に焦点を当て、シンポジウムを開催し*38、アリストテレスの翻訳をめぐる議論から、その困難さと時代と共に変化していく言葉に対していかに取り組んでいくかの課題が示された。

第 3 ユニットは、文化的多様性や宗教的多様性が現代社会にもたらす諸問題を、哲学、宗教学の視点から捉え直し、「共生」すなわち共に幸福に暮らしていける思想基盤を探ろうとしてきた。その中で、異なった宗教が共存していかざるを得ない現実の中で各宗教が独自性を保ちつつもいかに対話の基盤を提供していけるかどうかに関する具体的提言を得ることができ、所期の成果をほぼ達成した。ただ、イランとの学術研究に関しては、イスラーム一枚岩ではないイランの現状をより理解し、東西哲学を媒介するものとしてのイラン思想研究を推し進めていく必要性が浮き彫りとなった。また、アジアにおける宗教に関しては、文献研究とともに、実地調査によって、現状と課題を探究する必要性が、問題点として浮かび上がった。

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

＜自己評価の実施結果と対応状況＞

自己評価体制としては、毎月、各ユニット代表者による全体運営委員会、および各ユニットの会議を行い、ユニット間の連携や活動計画・研究成果・予算などの報告や審議などを行い、それにより、定期的な自己評価体制を構築している。その結果は研究員・客員研究員全員が含まれるメーリングリストにその都度配信しており、フィードバックも得ている。さらに、年一回の研究員総会を開催している。

予算配分のルールについては、各ユニットにほぼ均等に配分しつつも、会議に提出される実際の研究計画（趣旨概要・予算を研究行事ごとに明記したもの）に照らして臨機応変に予算配分を行うこととしてきた。さらに実務も担う研究助手・PD・PRA 等による事務局会議も行っており、事務局のシフト表は毎月センター長・副センター長に報告し、透明性を担保している。研究の自己評価体制であるが、年次研究成果報告書に関しては編集委員会を設置しており、特に若手の研究者による投稿論文に関しては正副 2 名の査読委員による査読を付けることとし、研究成果のクオリティを担保している。

費用対効果については、まず、センター予算による出張に関しては、上記の会議にて審議を行い、必要性や金額の妥当性を審議している。その成果は各研究員が閲覧できる「出張報告書」の形で必ず提出すること、また随時出張報告会やニューズレター・年報への記事の掲載を行うこととし、費用対効果を念頭においた緊張感を持った出張を行っている。ただ、国際化を目的とする本センターであるので、国際会議では通訳を雇い、年次成果報告書やニューズレターでは英語等への翻訳を委託することが多く、その費用がかさむことは、構造的な問題であろう。

＜外部(第三者)評価の実施結果と対応状況＞

外部評価体制として、学内 1 名と学外 4 名の有識者からなる評価委員会を設置している。毎年度末に評価委員会を招集し、研究状況・予算などの運営全般に関する評価を受けている。これまで 4 回の評価委員会での総合評価は A から D の 4 段階評価ですべて A であった。

具体的な評価内容の一例を挙げると次の通りである。

加藤尚武（京都大学名誉教授）「非常に困難な課題に対して具体的な成果を出している」（2013 年度）

高山守（東京大学名誉教授）「各ユニットにおいて瞠目しうる視点が開かれているように思います」（2013 年度）

清水博（東京大学名誉教授）「哲学の分野の研究成果としては期待できる」（2014 年度、「今後研究成果が期待できるか」という設問に対して）

評価委員による評価は当センターの運営委員会等で十分に検討され、研究員・客員研究員へのメーリングリストで報告され、今後の活動へと活かされている。

＜研究期間終了後の展望＞

（本プロジェクト終了後における研究の継続の有無、有の場合は今後の研究方針、無の場合は当該研究施設・装置・設備の活用方針を記述してください。）

この 5 年間で築かれた哲学研究の世界的ネットワークを活用し、各研究員の研究をさらに推進すべく、次年度からの研究の発展的継続を予定している。すなわち、「22 世紀の世界哲学の構築に向けて」を課題とし、個々の差異や固有性を維持したままなお普遍的でありうる哲学の方法や基準の形成に向けて、以下のような研究を行う予定である。

第 1 ユニットの研究活動のうち、近代日本哲学の解明を目指した研究を、「近代東アジア哲学」というより広い枠組みに視野を広げて課題設定しなおし、研究を継続する。さらには第 2 ユニットの「方法論研究」とその一部である「法概念研究」に発展的に統合し、それにより、「哲学的方法のイノベーション」というユニットを形成する予定である。このユニットは、「哲学的方法のイノベーション」の可能性を探るために、(1)「近代日本哲学」を東アジアという視点で読み直し、そこから未来の可能性を探ること、(2) 従来の哲学の方法を問い直すことによつて、新たな哲学の方法を探求すること、(3) 法を手引きとして、普遍的な理論の個別的な事象への適用の問題を明らかにすることを目指す。

第 3 ユニット関係では、「アジアにおける宗教・文化の衝突と融和のモードとプロセスの研究」

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

という課題を設定し、以下の2点に絞って研究を継続する。(1) これまで得られた研究のネットワークを活かしつつ、特にイランとの文化交流を引き続き行い、イスラームの地域文化研究の観点も取り入れ、世界哲学の構築に向けて研究を継続する。(2) 仏教やヒンドゥー教を中心としたアジアの諸宗教の衝突と融和について、文献、実地調査の両面から研究する。それにより22世紀の世界哲学へ向けての提言を行っていきたい。

また、国際哲学研究センターが設立した国際井上円了学会とそれに付随する井上円了研究は2015年4月に発足した東洋大学の学内組織である井上円了研究センターに引き継がれ、今後も継続的に研究が行われる。

<研究成果の副次的効果>

(研究成果の活用状況又は今後の活用計画(実用化・企業化の見通しや、特許の申請があればその申請状況・取得状況等)について、記述してください。)

国際井上円了学会の設立を通して、国内外から100名を超える会員が集まり、新たな研究者のネットワークが構築された。このネットワークは国際哲学研究センター終了後も東洋大学に引き継がれ、今後も研究基盤として活用される予定である。

韓国・東国大学校仏教大学と東洋大学文学研究科の提携に基づき、その具体化として国際哲学研究センターと東国大学校仏教大学との研究協定が結ばれた。この具体的成果をもとに、今後も提携による具体的な研究の推進が見込まれる。

吉田公平研究員のWEB講演会が、フランス・ストラスブール大学の正規の授業として行われ、東洋大学とストラスブール大学の研究・教育の新たな協力体制が構築された。今後も両大学での教育活動に活用されることが見込まれる。

イランとの他に類を見ない文化交流を行うことができた。イスラームプロパーとは違った観点からの現代イラン思想界を担う研究者・宗教家と連携し、研究を行った。

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 哲学の国際化 (2) 井上円了 (3) 近代日本哲学再考
 (4) 方法論研究 (5) ポスト福島哲学 (6) 「法」概念研究
 (7) イラン・イスラームとの対話 (8) アジアにおける多文化・多宗教の共生

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

【U1】

2016年

1. 柴田隆行「井上円了とヘーゲル」(『井上円了センター年報』第24号、2016年3月)
2. 小路口聡「王畿「蓬萊會籍申約」訳註——陽明門下の講会活動記録を読む(一)——」(『東洋思想文化』東洋大学文学部紀要第69集(東洋思想文化学科篇Ⅲ)、2016年3月)
3. 白井雅人 “The Re-discovery of Chinese Thought as “Philosophy” in the Japanese Meiji Period” (『国際哲学研究』5号、2016年2月) *34
4. 白井雅人 “Inoue Enryō’s Philosophy of Peace and War” (『国際井上円了研究』4号、2016年2月) *14
5. 三浦節夫「井上円了と清沢満之——近代日本の仏教者」(『現代と親鸞』第33号、2016年)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

2015 年

6. 白井雅人「赦す神と裁く神——後期西田哲学の宗教論——」(『国際哲学研究』、4号、pp. 107-115、2015年3月) *34

2014 年

7. 白井雅人「神なき時代の宗教 ——後期西田哲学における宗教の問題——」[日本語・英語](『国際哲学研究』、3号、pp. 133-141、2014年3月) *34
 8. 三浦節夫「井上円了の妖怪学」[日本語・英語](『国際井上円了研究』2号、2014年3月) *14

2013 年

9. ライナ・シュルツァ「世界哲学の交差点—井上円了における理論哲学と実践哲学—」(『国際井上円了研究』、1号、pp. 130-136、2013年3月) *14
 10. ライナ・シュルツァ「井上円了による大乘哲学とスピノザ哲学の比較について」(『国際井上円了研究』、1号、pp. 184-194、2013年3月) *14
 11. Rainer Schulzer, “Crossroads of World Philosophy: Theoretical and Practical Philosophy in Inoue Enryō” (International Inoue Enryō Research, pp. 49-55, mar, 2013) *14
 12. 白井雅人「自覚の事実とその展開 ——後期西田哲学における自覚の問題——」(『国際哲学研究』、2号、pp. 105-112、2013年3月) *34
 13. 三浦節夫「井上円了の生涯」(『国際井上円了研究』、1号、pp. 178-182、2013年3月) *14
 14. 三浦節夫「井上円了の世界旅行」(『国際井上円了研究』、1号、pp. 137-141、2013年3月) *14
 15. 三浦節夫「井上円了の全国巡講データベース」(『井上円了センター年報』、22号、2013年)

2012 年

16. ライナ・シュルツァ「井上円了の青年期読書録について—洋書を中心に—」(『井上円了センター年報』、21号、pp. 140-148、2012年)
 17. 白井雅人「井上円了『哲学一夕話』と西田幾多郎」(『国際哲学研究』、1号、pp. 101-108、2012年3月) *34
 18. 三浦節夫「井上円了に関する研究史」(『国際哲学研究』、1号、pp. 95-100、2012年3月) *34

2011 年

19. Schulzer, Rainer, “Philosopher’s Ashes Return to Tokyo: Inoue Enryō as Seen in Historical Roman Alphabet Sources” (Annual Report of the Inoue Enryō Center, pp. 186-236, Mar, 2011)
 20. 三浦節夫「井上円了の博士論文『仏教哲学系統論』について—井上家から寄贈された原稿をめぐって」(『井上円了センター年報』、20号、pp. 75-118、2011年)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

【U2】

2016 年

21. 大野岳史「自由になることと自由への導き—スピノザ『エチカ』における自由論の射程についての一考察」(『白山哲学』第 50 号、2016 年 2 月)
22. 三澤祐嗣「インド思想における世界構成原理と身心論—「ナーラーヤニーヤ章」第 326 章および第 327 章を中心として—」(『国際哲学研究』5 号、2016 年 2 月) *34

2015 年

23. オバーク・アンドリュウ “A realist self?” (Journal of Applied Ethics and Philosophy, 7、pp. 24-33、2015 年 9 月)
24. 武藤伸司「発生的現象学における自然数の考察とその構成 (1) —自然主義の基礎づけに関する現象学的方法の一つとして—」(『国際哲学研究』、4 号、pp. 121-130、2015 年 3 月) *34

2013 年

25. 沼田一郎「古代インドにおける倫理と社会規範——ダルマ (dharma) と〈法〉概念の接点——」(『国際哲学研究 別冊 2 〈法〉概念の時間と空間』、pp. 21-30、2013 年 3 月) *24
26. 山口一郎「直観と反省をめぐって—西田とフッサール」(『国際哲学研究』、2号、pp. 35-43、2013年3月)*34

2012 年

27. 大野岳史「理論モデル「存在-神-論」のスピノザ哲学への適用」(『国際哲学研究』、1 号、pp. 109-117、2012 年 3 月) *34
28. 山口一郎「国際哲学研究の課題と可能性」(『国際哲学研究』、1 号、pp. 27-33、2012 年 3 月) *34

【U3】

2016 年

29. 藤井明「インド初期密教と他宗教との関わり—特に大自在天の記述を中心にして—」(『東洋大学大学院紀要』第 52 集、2016 年 3 月)
30. 堀内俊郎「『縁起経釈論』の「生」「老死」解釈訳註」(『国際哲学研究』5 号、2016 年 2 月) *34
31. 堀内俊郎 [共訳] マルクス・ガブリエル「グローバル哲学？」(『国際哲学研究』5 号、2016 年 2 月) *34

2015 年

32. 長島隆「グローバル化時代における地域医療と医療倫理—3.11 以後の時代に—」(『医学哲学医学倫理』第 33 号、pp. 66-73、2015 年 11 月)
33. 堀内俊郎「『楞伽経』70 段における外教の涅槃観批判—仏教的観点による多文化共生の智慧としての「棲み分け」—」(『国際哲学研究』、4 号、pp. 151-158、2015 年 3 月) *34

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

34. 堀内俊郎「梵行・勝義・欲—『釈軌論』第二章の解釈にもとづく語義解釈・現代語訳例と経節 9, 14, 17-22, 30 訳注—」(『国際哲学研究』、4 号、pp. 159-176、2015 年 3 月) *34

2014 年

35. 関陽子「順応的管理モデルにおける生態学的基盤の課題—南方熊楠の思想を手がかりに」[日本語・英語](『国際哲学研究』、3 号、pp.157-164、2014 年 3 月) *34
36. 長島隆「Weltalter の研究動向とマルクス・ガブリエルのシェリング研究」(『国際哲学研究』、別冊 5、pp. 142-161、2014 年 12 月) *34

2013 年

37. 永井晋「アンリ・コルバンの現象学」(『国際哲学研究 別冊 3: 共生の哲学に向けて—イスラームとの対話—』、pp. 158-165、2013 年 6 月) *25
38. 堀内俊郎「仏教における法概念の多様性—思想史的観点から—」(『国際哲学研究』別冊 2 〈法〉概念の時間と空間、pp. 41-50、2013 年 3 月) *24
39. 堀内俊郎「『釈軌論』第 2 章経節 (62) — (63) 訳注—多文化共生の基盤の構築に向けての「法を説き聞き・法を聞く説く」こと—」(『国際哲学研究』、2 号、pp. 153-164、2013 年 3 月) *34

2012 年

40. 朝倉輝一「討議倫理とサンデル」(『国際哲学研究』、1 号、pp. 119-127、2012 年 3 月) *34
41. 菊地章太「蓄積される罪と罰 - 古代の道教思想から現代へ」(『国際哲学研究』東洋大学国際哲学研究センター、1号、pp. 34-37、2012年3月) *34
42. 堀内俊郎「仏教における共生の基盤の可能性としての「捨 (upekṣā)」」(『国際哲学研究』、1 号、pp. 129-135、2012 年 3 月) *34

<図書>

【U1】

2016 年

1. 白井雅人 [共著] Japanese Ethics and Technology (Springer: New York、2016 年 3 月)
2. 吉田公平・岩井昌悟・小坂国継・国際哲学研究センター第 1 ユニット [共編著] 『近代化と伝統の間—明治期の人間観と世界観』(教育評論社、2016 年 1 月、総ページ数 300) *7
3. 三浦節夫『井上円了—日本近代の先駆者の生涯と思想』(教育評論社、2016 年 1 月)

2014 年

4. 三浦節夫『新潟県人物小伝 井上円了』(新潟日報事業社、2014 年 5 月、総ページ数 114)
5. 三浦節夫『井上円了の妖怪学』(東洋大学史ブックレット、東洋大学井上円了記念学術センター刊行、2014 年 3 月、総ページ数 47)
6. 渡辺章悟『井上円了の世界旅行記—旅する創業者・海外編—』(東洋大学史ブックレット、東洋大学井上円了記念学術センター刊行、2014 年 3 月、総ページ数 44)

2013 年

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

7. 三浦節夫『井上円了と柳田国男の妖怪学』（教育評論社、2013年7月、総ページ数189）
8. 吉田公平『日本近世の心学思想』（研文出版、2013年3月、総ページ数570）

2012年

9. Girard, Frédéric, Emile Guimet, Dialogues avec les religieux japonais, textes établis, traduits et introduits par Frédéric Girard, Editions Findakly, Paris, 2012年12月、総ページ数179.
10. 三浦節夫『人間・井上円了-エピソードから浮かびあがる創立者の素顔』（東洋大学、2012年11月、総ページ数45）
11. 佐藤厚 [翻訳] 『井上円了著 現代語訳 仏教活論序論』（大東出版社、2012年10月、総ページ数187）
12. Girard, Frédéric [共編著] Avatamsaka Buddhism in East Asia: Huayan, Kegon, Flower Ornament Buddhism. Origins and Adaptation of a Visual Culture (Asiatische Forschungen) Harrassowitz Verlag, Wiesbaden, 2012年10月、総ページ数 XXIII + 412 pages.

2011年

13. Kopf, Gereon [共著] Japanese Philosophy. A Sourcebook, Honolulu, University of Hawaii Press, 2011年8月、総ページ数1341）

【U2】

2015年

14. 村上勝三・東洋大学国際哲学研究センター[共編著]『越境する哲学——体系と方法を求めて』（春風社、2015年11月、総ページ数475）*18
15. 村上勝三・東洋大学国際哲学研究センター[共編著]『ポストフクシマの哲学—原発のない世界のために』（明石書店、2015年8月、総ページ数291）*20

2014年

16. 村上勝三『知の存在と創造性』（知泉書館、2014年11月、総ページ数243）
17. 河本英夫『〈わたし〉の哲学——オートポイエーシス入門』（角川書店、2014年5月、総ページ数230）

2013年

18. 清水高志『ミシェル・セール 普遍学からアクターネットワークまで』（白水社、2013年11月、総ページ数303）

2012年

19. 山口一郎『現象学ことはじめ 改訂版』（日本評論社、2012年10月、総ページ数343）

【U3】

2016年

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

20. 宮本久義・堀内俊郎[共編著]『宗教の壁を乗り越える—多文化共生社会への思想的基盤』(ノンブル社、2016年1月、総ページ数292) *33

2015年

21. 菊地章太『日本人とキリスト教の奇妙な関係』(角川新書(KADOKAWA)2015年5月、総ページ数220)
22. 渡辺章悟[共編著]『般若経大全』(春秋社、2015年1月、総ページ数538)

2014年

23. 菊地章太『エクスタシーの神学—キリスト教神秘主義の扉をひらく』(ちくま新書、筑摩書房、2014年12月、総ページ数222)

2013年

24. 菊地章太『ユダヤ教 キリスト教 イスラーム—神教の連環を解く』(ちくま新書、筑摩書房、2013年12月、総ページ数240)
25. 菊地章太『妖怪学の祖 井上圓了』(角川選書、角川学芸出版、2013年1月、総ページ数216)

2012年

26. 井上忠男[翻訳]『フランソワ・ブニヨン著:赤十字標章の歴史~人道のシンボルを巡る国家の攻防』(東信堂、2012年9月、総ページ124)
27. 菊地章太『道教の世界』(選書メチエ、講談社、2012年1月、総ページ数198)
28. 村松聡[共著]、『シリーズ生命倫理学 第2巻生命倫理の基本概念』(丸善出版、2012年1月、担当:第9章「パーソン」pp. 140-157、総ページ数251)

2011年

29. 菊地章太『葬儀と日本人—位牌の比較宗教史』(ちくま新書、筑摩書房、2011年8月、総ページ数228)

<学会発表>

【U1】

2015年

1. 伊吹敦『『観心論』と『修心要論』の成立とその影響』(第86回禅学研究会学術大会、花園大学、2015年11月28日)
2. 竹村牧男「東洋大学における井上円了研究の現状」(実践女子学園下田歌子研究所シンポジウム「学祖研究の現在」、実践女子大学、2015年11月21日)
3. 竹村牧男「日本的靈性について」(東洋大学・ストラスブール大学協定締結30周年記念シンポジウム「伝統と現代—日本文化・歴史・思想」、ストラスブール大学、2015年9月17日)
4. 白井雅人 “Technology, artificiality, and human beings in the later Nishida Philosophy” (Technology and Ethics: Sweden meets Japan、2015年9月3日)
5. 小路口聡「王畿の良知心学と講学活動——「交脗の益」について——」(科研成果発表国際シンポジウム、東洋大学、2015年8月23日)
6. 伊吹敦「初期禪宗と『大乘起信論』」(東アジア仏教学術大会第4回学術大会、扶余・百済)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

歴史文化館、2015年6月19日)

2014年

7. 三浦節夫「井上円了」(第32回日本森田療法学会、東京慈恵会医科大学、2014年11月9日)
8. 白井雅人「The Re-discovery of Chinese Thought as “Philosophy” in the Japanese Meiji Period」(日中哲学フォーラム、北京外語大学、2014年9月21日)
9. 竹村牧男「西田と大拙の真宗理解をめぐって」(西田哲学会第12回年次大会シンポジウム「西田幾多郎と鈴木大拙」、西田幾多郎記念哲学館(石川県かほく市)、2014年7月20日)
10. 三浦節夫「井上円了の妖怪学」(東アジア文化交渉学会、中国・上海・復旦大学、2014年5月9日)
11. 白井雅人「“Inoue Enryō’s attitude to evolutionary theory」(International Conference: Bounds of Ethics in a Globalized World、Christ University、India、2014年1月8日)

2013年

12. 白井雅人「井上円了における進化論受容と東アジア的要素」(東アジア文化交渉学会第5回年次大会 パネル『西洋哲学受容における井上円了の役割』、香港城市大学、2013年5月11日)
13. 三浦節夫「井上円了の東アジア巡講」(東アジア文化交渉学会第5回年次大会 パネル『西洋哲学受容における井上円了の役割』、香港城市大学、2013年5月11日)
14. ライナ・シュルツァ、「初期円了にみられる「良心」についての比較倫理的考察」(東アジア文化交渉学会第5回年次大会 パネル『西洋哲学受容における井上円了の役割』、香港城市大学、2013年5月11日)
15. 岩井昌悟「井上円了の「宇宙万物に対する徳義」—円了の環境資源に対する態度」(TIEPh主催シンポジウム「円了×熊楠—近代日本のエコ・フィロソフィ」、東洋大学、2013年2月24日)

2012年

16. Kopf, Gereon, “What to do with the Ox: An Exegesis of the Ox-Herding Pictures” (“Buddhist Meditation from Ancient India to Contemporary Asia,” Dongguk University, 2012年11月30日)
17. 永井晋「井上円了の妖怪学」(シンポジウム「W・B イェイツと井上円了の世界」、東洋大学、2012年11月18日)
18. Kopf, Gereon, “Kōans, Haiku, Logic: Teaching Japanese Philosophy as Philosophy” (50th Anniversary Conference of the Japan Study Program of the Associated College of the Midwest and the Great Lakes Colleges Association, Earlham College, 2012年10月6日)
19. 小路口聡「天地を生み出す良知について」(白山中国学会第2回大会、東洋大学、2012年7月28日)
20. 播本崇史「明末天主教の霊について」(白山中国学会第2回大会、東洋大学、2012年7月28日)
21. Kopf, Gereon, “Philosophy as Expression: Towards a New Model of Intercultural Philosophy” (西田哲学会第10回年次大会、京都産業大学、2012年7月21日)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

22. 竹村牧男『『大乘起信論』の人間観』(第1回韓・中・日国際仏教学術大会「東アジアにおける仏性・如来蔵思想の受容と変容」(基調講演)、ソウル市、2012年6月12日)
23. Kopf, Gereon, “Zen Buddhism, Nishida Kitarō, and the End of Ethics” (International Association of Philosophy and Literature, Tallinn University, 2012年5月30日)
24. 相楽勉「ハイデガーにおける知、行為、労働」(3.11以後を考える日独哲学会議ワークショップ1、東京ドイツ文化センター、2012年3月16日)
25. Kopf, Gereon, “Philosophy as Expression: One Japanese Buddhist Approach to Conceptualizing ‘Intercultural Philosophy’” (Comparative and Continental Philosophy Circle, San Diego, 2012年3月9日)
26. 吉田公平「陽明学者・川田雄琴と『川田雄琴全集』の試み」(白山中国学会、東洋大学、2012年1月28日)
27. Girard, Frédéric, « Xuanzang 玄奘 (602-664) and the schools of Dhyāna in Japan (Zen) » (Imagination, Narrative, Localization, université Chulalongkora, EFE0, Hongkong, 5-9 janvier 2012).

2011年

28. Kopf, Gereon, “Philosophy as Criticism: Hakamaya, Nishida, and Philosophical Subversion” (“Japanese Philosophy as an Academic Discipline,” Chinese University of Hong Kong, 2011年12月11日)
29. Kopf, Gereon, “Critical or Topological: Reading Nishida as Subversive Philosopher” (Society of Asian and Comparative Philosophy/American Academy of Religion, San Francisco, 2011年11月20日)
30. Kopf, Gereon, “Zen Stories for Today: A Collaborative Model of Research Mentorship” (“FaCE Value: Advances Through Collaboration,” Associate Colleges of the Midwest, Colorado College, 2011年10月30日)
31. Shirai, Masato, “Toward Being for Others, with Others — Suggestions from Kitaro Nishida’s “I and Thou” —” (The 8th International Whitehead Conference, Sophia University, September 28, 2011)
32. ライナ・シュルツァ「加藤弘之と井上円了における《真理》について」(白山中国学会大会、東洋大学、2011年7月30日)

【U2】

2015年

33. 河本英夫「ゲーテ自然学とオートポイエーシス」(ゲーテ自然科学の集い、生命誌研究館、2015年11月7日)
34. 村上勝三「デカルト形而上学と道德の基礎」(デカルト：形而上学の道德-村上勝三の退職を記念して、パリ第1大学、2015年9月19日)
35. 寅野遼「スピノザにおける多数者と共通感情」(日仏哲学会2015年秋季大会、立教大学、2015年9月12日)
36. 大野岳史「マルブランシュにおける「在りて在るもの」」(日本宗教学会第74回学術大会、創価大学、2015年9月5日)
37. オーバーグ・アンドリュウ “Searching for a better definition of the self” (Presented

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

at the Self and (its) Realization(s) International Conference、札幌市、北海道、2015年5月)

2014年

38. オバーク・アンドリュウ “Beating the bystander effect: Surveillance, moral behavior, and the self” (第9回応用倫理国際会議、北海道大学、2014年10月31日)
39. 大野岳史「スピノザ『エチカ』第四部定理六八備考におけるキリストの霊」(日本宗教学会第83回学術大会、同志社大学、2014年9月13日)
40. オバーク・アンドリュウ “After the Snowden leaks: Considering government surveillance from a broader perspective” (応用哲学会第六回年次研究大会、関西大学高槻ミュージックキャンパス、応用哲学会第6回研究大会、2014年5月10日)

2013年

41. 渡名喜庸哲「ポスト 3.11 の人間の地位——ハイデガー、アンダース、デュピュイ、ナンシー」(一橋大学哲学・社会思想学会第14回研究大会シンポジウム、一橋大学、2013年12月7日)
42. 竹中久留美「なぜ is から ought は導き出されないのか」(日本イギリス哲学会第92回関東部会例会、東京大学、2013年12月7日)
43. 大野岳史「スピノザにおける啓示の認識」(日本宗教学会第72回学術大会、國學院大学、2013年9月7日)
44. 沼田一郎「ダルマ文献における「寄託」規定」(日本印度学仏教学会第64回学術大会、島根県民会館、2013年9月1日)
45. 竹中久留美「ヒュームのミッシング・シェイド・オブ・ブルーについて」(日本イギリス哲学会第37回研究大会、東北大学、2013年3月26日)
46. 渡名喜庸哲「破局の凡庸性：ジャン＝リュック・ナンシー『フクシマの後で』の後で」(東京大学「グローバル化時代における現代思想——概念マップの再構築」(CPAG) 若手哲学研究者ワークショップ「ジャン＝リュック・ナンシー『フクシマの後で』から出発して」、東京大学、2013年2月23日)
47. Tonaki, Yotetsu, “Quelques réflexions sur la philosophie d’après Fukushima” (Séminaire du CSPRP : Philosophie politique et écologie politique, Université Paris Diderot, 2013年2月14日)

2012年

48. 大西克智「モリニズムが『きわめて魅惑的で心地よい』(パスカル『恩寵に関する文書』)と言われるのはなぜか」(パスカル研究会定期公演、武蔵大学、2012年11月24日)
49. 大野岳史「スピノザ『形而上学的思想』における「区別」の理論」(第61回中世哲学会大会、文教大学、2012年11月10日)
50. 大野岳史「スピノザにおける無知としての奇跡」(日本宗教学会第71回学術大会、皇學館大学、2012年9月8日)
51. 沼田一郎「贖罪規定の変容から見た dharma 文献の構造」(日本印度学仏教学会第63回学術大会、鶴見大学、2012年6月30日)
52. Yamaguchi, Ichiro, “Technik und Menschenwürde in der Philosophie nach Fukushima” (テュービンゲン大学, Forum Scientiarum 研究所, June 19, 2012)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

53. 大野岳史「スピノザにおける必然的実在と無限定な継続」(スピノザ協会第 59 回例会研究会、東京大学、2012 年 1 月 28 日)

2011 年

54. 清水高志「結合法論におけるライプニッツ」(日本ライプニッツ協会第 3 回大会、神戸大学、2011 年 11 月 12 日)
55. 山口一郎、G. シュテンガー「共創造性 間文化的理解と共存のための鍵概念」(間文化現象学会、立命館大学、2011 年 11 月 3 日)
56. 山口一郎「無意識の明証性をめぐって」(白山哲学会、東洋大学、2011 年 10 月 22 日)

【U3】

2015 年

57. 藤井明「密教における殺と降伏」(東洋大学東洋学研究所研究発表例会、東洋大学、2015 年 12 月 19 日)
58. 朝倉輝一「意志決定における妥協の問題」(第 34 回日本医学哲学・倫理学会、新潟、2015 年 11 月 8 日)
59. 堀内俊郎「『楞伽経』の構成に関する一考察—宋訳と梵本との相違から—」(日本印度学仏教学会第 66 回学術大会、高野山大学、2015 年 9 月 19 日)
60. 三澤祐嗣「『モークシャダルマ篇』第 326 章におけるヴェーハ説」(日本宗教学会第 74 回学術大会、創価大学、2015 年 9 月 6 日)
61. 永井晋「象徴の哲学—生命の論理としてのカバラー」(日本シェリング協会シンポジウム、神奈川大学、2015 年 7 月 5 日)
62. 堀内俊郎“Toward a critical edition of the Laṅkāvatārasūtra: The significance of the palm-leaf manuscript” (The 16 th World Sanskrit Conference、タイ、2015 年 7 月 1 日)

2014 年

63. 山口しのぶ “Hinduism and Buddhism in Nepal—The Cult of Kumari as a Symbol of Pluralism” (Respect for Religious Pluralism and Multi-cultural and by the sub-term Many Religions are Natural and must be Respected for Establish the Harmony in the World、バリ・インドネシア・Institut Hindu Dharma Negeri Denpasar、2014 年 10 月 24 日)
64. 堀内俊郎「『楞伽経』の外教批判と多文化の共生」(日本宗教学会第 73 回学術大会、同志社大学、2014 年 9 月 13 日)
65. 堀内俊郎「『四卷楞伽』と『楞伽経』—求那跋陀羅(グナバドラ)訳の特徴—」(日本印度学仏教学会、武蔵野大学、2014 年 8 月 30 日)
66. 堀内俊郎“Critisism of Heretics in the Laṅkāvatārasūtra: Towards constructing a philosophy of multicultural coexistence from the viewpoint of Buddhism” (IABS 17、オーストラリア・ウイーン大学、2014 年 8 月 22 日)
67. 長島隆「ドイツ観念論の三つの道」(早稲田大学哲学会【シンポジウム「ドイツ観念論の再検討】、早稲田大学戸山キャンパス、2014 年 7 月 19 日)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

2013 年

68. 小路口聡「儒家倫理の現代的意義——共生社会を支えるケアの倫理——」(国際學術研討會「跨文化視域之儒家倫理研究：經典、制度與社會生活」、復旦大學、2013 年 12 月 22 日)
69. 関陽子「日本とヨーロッパを結んだ「エコロジー」—C. ダーウィン、南方熊楠、今西錦司から」(上智大学ヨーロッパ研究所シンポジウム「日本とヨーロッパを結ぶ「共生」の思想—宗教、哲学、環境思想、言語学の側面から考える—」、上智大学、2013 年 11 月 17 日)
70. 竹村牧男「共生ということと仏教の課題」、上智大学ヨーロッパ研究所主催「日本とヨーロッパを結ぶ「共生」の思想——宗教、哲学、環境思想、言語学の側面から考える」、上智大学、2013 年 11 月 16 日)
71. 堀内俊郎「『釈軌論』第二章所引用の阿含と世親・徳慧による解釈の特色」(日本宗教学会第 72 回学術大会、國學院大学、2013 年 9 月 7 日)
72. 渡辺章悟「般若経の三乗における菩薩乗の意味」(印度学仏教学会第 64 回学術大会、島根県民会館、2013 年 9 月 1 日)
73. 堀内俊郎「『釈軌論』第二章所引の阿含と世親・徳慧による解釈の特色」(日本宗教学会第 72 回学術大会、國學院大學(渋谷キャンパス) 2013 年 9 月)
74. 長島隆「地域医療とターミナルケア」(北海道生命倫理研究会、札幌医科大学、2013 年 8 月)
75. 山村(関)陽子「共生社会のための「科学コミュニケーション」の役割—獣害対策からの考察」(共生社会システム学会 2013 年度大会、茨城大学、2013 年 7 月 6 日)
76. バイカル「モンゴルキリスト教の現在」(清泉女学院大学創立 10 周年記念シンポジウム「インカルチュレーション(文化的受肉)—多文化主義と地域教会の可能性を考える」、長野市勤労者女性会館、2013 年 2 月 16 日)

2012 年

77. 渡辺章悟「赤十字の思想と仏教の憐愍」(日本赤十字秋田看護大学、2012 年 11 月 13 日)
78. バイカル「モンゴルのオボー信仰からみた環境開発の在り方—内モンゴル自治区正藍旗を中心として」(Symposium in Olgonteger University, Mongolia, November 1, 2012)
79. 永井晋「神名の沈黙と語り—〈動き〉の現象学」(上智哲学会シンポジウム「沈黙と語り—宗教思想のゆくえ」、上智大学、2012 年 10 月 28 日)
80. 斎藤明「複人称の倫理学—仏教的行為論の性格をめぐって—」(日本倫理学会第 63 回大会、日本女子大学、2012 年 10 月 13 日)
81. 斎藤明「南アジアと日本—大乘仏教研究の昨日・今日・明日—」(日本南アジア学会第 25 回全国大会、東京外国語大学、2012 年 10 月 7 日)
82. 山内廣隆「環境と哲学—環境を巡る哲学の旅—」(日本都市計画学会中国四国支部 2012 年度特別講演会、広島市まちづくり市民交流プラザ、2012 年 7 月 29 日)
83. 三澤祐嗣「Aḥirbudhnyasaṃhitā における sūddhetaraśṛṣṭi 説とサーンキヤ説」(日本印度学仏教学会第 63 回学術大会、鶴見大学、2012 年 6 月 30 日)
84. 堀内俊郎「ヴァスバンドゥ(世親)『釈軌論』が展開する大乘仏説・非仏説論」(国際東方学者会議(ICES57), Symposium V, 日本教育会館、2012 年 5 月 25 日)
85. 永井晋「現代フランスにおける神学的現象学」(宗教哲学会シンポジウム、2012 年 3 月 24 日、京都大学)
86. 竹村牧男「自然共生社会の思想的基盤を探る——仏教の立場から」(TIEPh・ICAS 共催国際セミナー「環境の危機と人間の危機——自然と共生する社会とは」、東洋大学白山キャンパ

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

ス、2012年3月10日)

2011年

87. 竹村牧男「迫られる文明原理の転換と宗教哲学の使命—人間は欲望を制御できるか？」(宗教・研究者エコ・イニシアティブ (RSE) 主催第2回宗教と環境シンポジウム「新しい文明原理の生活化と宗教」基調講演、東洋大学白山キャンパス、2011年11月12日)
88. 長島隆「ドイツにおける自然療法—その過去と現在」(日本医学哲学倫理学会、科研費に基づく公開講座、安与ホール、2011年11月3日)
89. 竹村牧男「自然観の役割—人間と自然の共生関係を求めて」(TIEPh 主催公開シンポジウム「人間と自然の共生と持続可能な関係を求めて～「風土」のしらべから～」、東洋大学白山キャンパス、2011年10月8日)
90. 永井晋「創造的想像力の現象学」(京都大学宗教哲学研究会「宗教哲学の課題」、2011年9月15日)
91. 菊地章太「日本宗教史を大学でどう教えるか - 中国宗教の論じ方と関連して」(日本宗教学会第70回学術大会 (日本宗教研究諸学会連合共催パネル)、関西学院大学、2011年9月4日)

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

<既に実施しているもの>

1. 第1ユニット

1-1. 平成23年度

1-1-1. 研究会

- 7月28日 第1回研究会：三浦節夫 (研究員)「井上円了に関する研究史」*5
- 10月26日 第2回研究会：ライナ・シュルツァ (客員研究員)「井上円了による『理論 vs 実践』というパラダイムの中の仏教思想」*5
- 11月30日 第3回研究会：白井雅人 (研究助手)「井上円了『哲学一夕話』と西田幾多郎」*5
- 12月21日 第4回研究会：吉田公平 (研究員)「東敬治と井上円了」*5
- 2月16日 第5回研究会：竹村牧男 (研究員)「井上円了の思想について」(第1ユニット・第2ユニット合同)*5

1-2. 平成24年度

1-2-1. 研究会

- 6月27日 第1回研究会：村山保史 (大谷大学)「明治期の東京大学における外国人哲学教師」*5
- 7月27日 第2回研究会：相楽勉 (研究員)「哲学導入期の「実在」問題」*5
- 9月13日 第3回研究会：呉震 (客員研究員)「近世日本における中国善書の流伝およびその影響—中江藤樹の宗教観を中心に—」*5
- 10月31日 第4回研究会：岩井昌悟 (研究員)「日本をどう考えるのか—井上円了の忠と孝—」*5
- 11月28日 第5回研究会：佐藤厚 (客員研究員)「井上円了における伝統仏教教学体系と仏教・哲学一致論」*5
- 12月7日 第6回研究会：井上克人 (関西大学)「明治の哲学界：有機体の哲学とその系譜」*5
- 12月13日 第7回研究会：呉光輝 (廈門大学外文学院)「中国における日本近代哲学研究の現状」*5
- 3月14日 第8回研究会：小坂国継 (客員研究員)「井上円了の相含論とスピノザ主義」*5

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

1-2-2. ワークショップ

- ・ワークショップ「西田幾多郎の宗教哲学キリスト教と仏教の立場から」*5

日時：平成 24 年 7 月 11 日

場所：東洋大学白山キャンパス 5 号館 2 階 5201 教室

発表者：

ゲレオン・コプフ（客員研究員）「西田幾多郎における中国仏教について」

石井砂母亜（ルーテル学院大学非常勤講師）「西田哲学とキリスト教—愛の概念の展開として」

小坂国継「西田哲学と宗教哲学」

1-2-3. シンポジウム

- ・国際井上円了学会設立大会・記念講演・公開シンポジウム「国際人としての井上円了」*13

日時：平成 24 年 9 月 15 日

場所：東洋大学白山キャンパス 2 号館 16 階スカイホール

設立記念講演：竹村牧男「井上円了の哲学について」

発表者：

ゲレオン・コプフ「井上円了の近代仏教」

ミヒヤエル・ブルチャー（東京大学特任准教授）「井上円了における「主軸」—日本思想の近代化についての一考察」

ライナ・シュルツァ「世界哲学の交差点—井上円了における理論哲学と実践哲学—」

王青（中国社会科学院）「蔡元培と井上円了の宗教思想の比較研究」

三浦節夫「井上円了の世界旅行」

1-2-4. 国際講演会・国際会議

- ・WEB 国際講演会「日本近代における漢学と西学—中江兆民を中心に」*10

日時：平成 24 年 11 月 14 日

場所：東洋大学白山キャンパス 5 号館 4 階特別会議室

講演者：吉田公平

1-2-5. 海外研究調査・研究集会

- ・国際井上円了学会アルザス研究集会「井上円了とその時代」

日時：平成 24 年 6 月 29 日—7 月 3 日

場所：フランス：アルザス・欧州日本学研究所

発表者：

竹村牧男「井上円了の哲学について」

三浦節夫「井上円了の生涯」

ライナ・シュルツァ「大乘哲学とスピノザ哲学の比較についての井上円了の考え」

市川義則（パリ国際大学都市日本館図書室）「井上円了の洋行と日本人の海外移住—民衆教育者としての一側面」

エディ・デュフルモン（ボルドー第三大学）「唯物論と無神論を巡る論争—中江兆民、井上円了と仏教」

フレデリック・ジラルル（客員研究員）「明治期に於ける佛教の状況について」

黒田昭信「思想史の方法論—思想の受容史から受容の思想史へ」

1-3. 平成 25 年度

1-3-1. 研究会

6 月 12 日 第 1 回研究会：出野尚紀（客員研究員）「開堂初期に哲学堂を訪れた人々」*5

7 月 10 日 第 2 回研究会：渡部清（上智大学名誉教授）「三宅雪嶺の哲学—儒教心学再生の試み」*5

9 月 14 日 第 3 回研究会：ジョン・マラルド（ノースフロリダ大学名誉教授）“The Meiji Introduction of Philosophy to Japan as the Learning of a Foreign Language”

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

*5

- 10月16日 第4回研究会：岡田正彦（天理大学）「井上円了と哲学宗」*5
 12月11日 第5回研究会：末木文美士（国際日本文化研究センター）「井上円了と日本の哲学」*5
 12月18日 第6回研究会：佐藤将之（国立台湾大学）「〈中国哲学〉学問領域の創業者としての井上円了」*5
 12月19日 特別講義：佐藤将之「中国思想における「誠」概念のダイナミズムと荀子」
 1月15日 第7回研究会：西村玲（中村元東方研究所）「近世排耶論の思想的展開——明末から井上円了へ——」*5
 1月17日 特別講義：フレデリック・ジラルール「玄奘三蔵の思想、伝説と日本」
 1月30日 第8回研究会：フレデリック・ジラルール「エミル・ギメ時代の佛教と宗教学」*5

5

1-3-2. シンポジウム

- ・国際井上円了学会第2回学術大会「井上円了と近代日本」*13
 日時：平成25年9月16日
 場所：東洋大学白山キャンパス8号館7階125記念ホール
 講演者：ジョン・マラルド
 発表者：
 寅野遼（東洋大学大学院博士課程）
 甲田烈（相模女子大学非常勤講師）
 アグスティン・ハシント・サバラ（ミチョアカン大学院大学）
 平田俊博（山形大学名誉教授）
 ウィリアム・ボディフォード（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）

1-3-3. 国際講演会・国際会議

- ・東アジア文化交渉学会*11
 日時：平成25年5月9日～12日
 場所：香港：香港城市大学
 パネルタイトル：「東アジアにおける西洋思想受容の初期段階—井上円了の役割を中心に—」
 発表者：
 三浦節夫「井上円了の東アジア巡講」
 ライナ・シュルツァ「初期円了にみられる「良心」についての比較倫理的考察」
 王青「井上円了と中国近代哲学」
 白井雅人「井上円了における進化論受容と東アジア的要素」
- ・国際井上円了学会アメリカ研究集会「井上円了哲学と間文化の哲学」
 日時：平成25年5月23日～27日
 場所：アメリカ合衆国：アイオワ州デコーラ市ルーター大学
 ワークショップ I 「井上円了のスペイン訳とスペイン語圏で普及させる方法」
 ワークショップ II 「井上円了の英訳と英語圏で普及させる方法」
 ワークショップ III 「間文化の哲学とは何か」
 ゲレオン・コプフ “The Project of Intercultural Philosophy”
 ライナ・シュルツァ “The Project of Comparative Ethics”
- シンポジウム：「井上円了の哲学」
 三浦節夫「井上円了の妖怪学」“Inoue Enryō's Mystery Studies”
 ライナ・シュルツァ「初期円了にみられる「良心」についての比較倫理的考察」
 “Comparative Ethics of Conscience in the Early Inoue Enryō”
 アグスティン・ハシント・サバラ“Reeducating the Nation: A Sketch of the Educational Ideals in Inoue Enryō and Nishida Kitarō”「国の再教育：井上円了と西田幾多郎の教育理念の素描」

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

遊佐道子（西ワシントン大学）“Philosophy, The Philosophy Society, The Philosophy Academy—Inoue Enryō’s Contribution to Modernizing Japanese Mentality from Within”
「哲学・哲学会・哲学館——日本の精神的近代化における井上円了の貢献」

カルマンソン・リーア（ドレーク大学）“The Temple of the Absolute: Inoue and the Ethics of Practicing the Impracticable” 「哲学堂公園 — 井上円了における実践不可能なものを実践することの倫理」

ハーリー・スコット（ルーター大学客員准教授）“Tathāgatagarbha: doctrine or philosophy – a conversation between Yinshun and Inoue” 「佛性は教義か哲学か — 印順法師と井上円了との対話」

ゲレオン・コプフ “The Ghost in the gate of Philosophical Reason” （哲理門の中にいる幽霊）

1-4. 平成 26 年度

1-4-1. 研究会

- 5月14日 連続研究会「明治期日本人の人間観と世界観」(1)：ゲレオン・コプフ「表現の倫理—仏教哲学における非二元論の現代哲学への適用」*6
- 6月11日 連続研究会「明治期日本人の人間観と世界観」(2)：吉田公平「心学の変身—西田幾多郎の「修養」と「研究」、夏目漱石「こころ」の苦悩—」*6
- 7月9日 連続研究会「明治期日本人の人間観と世界観」(3)：岡田正彦「梵暦運動史の研究—19世紀の日本における仏教科学の展開—」*6
- 9月10日 研究会：ウルリッヒ・ジーク（マールブルク大学）「善の曖昧さ—精神の戦争におけるドイツ人の教授達—」
- 10月8日 連続研究会「明治期日本人の人間観と世界観」(4)：出野尚紀「明治期と自然災害」*6
- 11月12日 連続研究会「明治期日本人の人間観と世界観」(5)：白井雅人「西田幾多郎『善の研究』の人間観と世界観」*6
- 12月10日 連続研究会「明治期日本人の人間観と世界観」(6)：相楽勉「『美学』の受容にみる明治期における人間観・世界観」、岩井昌悟「日本近世の仏伝に見る日本人の人間観—『釈迦如来誕生会』と『釈迦御一代記図会』—」*6
- 1月14日 連続研究会「明治期日本人の人間観と世界観」(7)：西村玲「釈迦仏からゴータマ・ブッダへ——釈迦信仰の思想史」*6
- 2月18日 連続研究会「明治期日本人の人間観と世界観」(8)：三浦節夫「日本近代における伝統の「発見」—井上円了の『仏教活論序論』」*6
- 2月25日 連続研究会「明治期日本人の人間観と世界観」(9)：小坂国継「大西祝と『良心起原論』」*6
- 3月13日 連続研究会「明治期日本人の人間観と世界観」(10)：小路口聡（研究員）*6

1-4-2. シンポジウム

- ・国際井上円了学会第3回学術大会*13

日時：平成 26 年 9 月 13 日

場所：東洋大学白山キャンパス 8 号館 7 階 125 記念ホール

開会あいさつ：竹村牧男

一般発表

長谷川琢哉（大谷大学）「スペンサーと円了」

甲田烈「『不思議』の相含構造：井上円了と南方熊楠をめぐって」

佐藤厚「吉谷覚寿の思想と井上円了」

寅野遼「井上円了における中心の諸問題」

ラルフ・ミュラー（京都大学）「井上円了の『禅宗哲学序論』における禅に関するメタ理論の分類」

特別講演

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

ウルリッヒ・ジーク「大なる総合を求めて—1900年頃の哲学」

閉会あいさつ：村上勝三

1-4-3. 国際講演会・国際会議

- ・国際井上円了学会 エトベシュ・ロラード大学共催 ハンガリー研究集会

日時：平成 26 年 4 月 24 日～25 日

場所：ハンガリー、エトベシュ・ロラード大学

【公開講演会】(2014 年 4 月 24 日)

竹村牧男「日本人の宗教生活と仏教」

【研究集会】「井上円了と明治時代の日本—哲学・宗教・教育をめぐって」(2014 年 4 月 25 日)

開会の辞：コロマン・ブレンネル (エトヴェシュ大学)

研究発表 [午前の部]「明治期の哲学者・教育者 井上円了」 司会：梅村裕子 (エトヴェシュ大学)、竹村牧男

三浦節夫「井上円了の生涯」

竹村牧男「明治期の仏教界と井上円了」

岩井昌悟「井上円了の教育と仏教」

フレデリック・ジラル「明治時代に於ける哲学と宗教学—円了の場合とその周辺—」

ライナ・シュルツァ「後期円了の良心論」

朝倉輝一 (研究員)「井上円了の後期の思想について」

研究発表 [午後の部]「明治時代の日本の思想と学問」 司会：サボー・バラージュ (エトヴェシュ大学)、エシュバッハ・サボー・ヴィクトリア (チュービンゲン大学)

I. 宗教・言語学・教育

梅村裕子『『政教日記』における井上円了のキリスト教観」

エシュバッハ・サボー・ヴィクトリア「上田萬年と新しい言語学」

II. 思想史を中心に

ファルカシュ・イルディコー (カーロリ大学)「伝統は架空か実存か？明治時代のイデオロギーについての考察」

サボー・バラージュ「西洋哲学の流れを汲む明治の思想」

タコー・フェレンツ (エトヴェシュ大学大学院生)「丸山真男は明治維新の『新』をどう観たか？」

閉会の辞：三浦節夫

- ・東洋大学国際哲学研究センター・東国大学校仏教大学共同研究「20 世紀以後における韓日両国仏教の変遷について」秋期セミナー*9

日時：平成 26 年 11 月 8 日

場所：韓国・東国大学校仏教大学

プログラム：

開会の辞：鄭承碩 (東国大学校仏教大学)

祝辞：竹村牧男

祝辞：朴正克 (東国大学校仏教大学)

竹村牧男「近代日本の仏教界と井上円了」

金浩星 (東国大学校仏教大学)「井上円了の解析学的方法論：奮闘哲学を中心に」

以上、[司会]禹濟宣、[通訳]朴基烈

三浦節夫「井上円了と東アジア (一) —井上円了の朝鮮巡講」

姜文善 (慧諫スニム) (東国大学校仏教大学)「近代期韓日の比丘尼の存在様相に対する時論的考察—宗制の変遷を中心に」

佐藤厚「100 年前の東洋大学留学生、李鐘天—論文「仏教と哲学」と井上円了の思想」

高榮燮 (東国大学校仏教大学)「大韓時代の日本の留学生達の仏教研究の動向」

以上、[司会]金浩星、[通訳]朴基烈

質疑・応答及び討論

閉会式

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

講評：竹村牧男

全体総括：鄭承碩（東国大学校仏教大学）

- ・東洋大学国際哲学研究センター・東国大学校仏教大学共同研究「20世紀以後における韓日両国仏教の変遷について」春期セミナー*8

日時：平成27年3月19日

場所：東洋大学白山キャンパス8号館7階125記念ホール

プログラム：

開会挨拶：竹村牧男

慧源スニム

佐藤厚「1917年、朝鮮仏教界首脳部の日本訪問」（仮題）

高榮燮「萬海 韓龍雲の日本認識」

三浦節夫「日本近代における伝統の「発見」—井上円了の『仏教活論序論』」

金浩星「日本仏教と韓国仏教の親縁性—柳宗悦の「南無阿弥陀仏」を中心として—」

竹村牧男「西田幾多郎の禅思想について」

慧源スニム「近代時代の韓日比丘尼の修行生活と悟り」

総合討論

閉会挨拶：村上勝三

1-5. 平成27年度

1-5-1. ワークショップ

- ・ワークショップ「江戸期における漢学者たちの人間観の特色—中国との比較—」

日時：平成27年8月26日

場所：東洋大学白山キャンパス6号館3階6310教室

プログラム：

はじめに：小路口聡

申緒璐（杭州師範大学）「楠本碩水の「朱王合編」について—並木栗水と楠本碩水—」

呉震「石門心学についての若干の問題」

銭明（浙江省社会科学院）「水戸学と陽明学—徳川ミュージアムの儒学関連資料の調査を中心として—」

討議：[コメンテーター]吉田公平、[司会]小路口聡

1-5-2. シンポジウム

- ・6月13日「比較思想学会共催シンポジウム」

- ・国際井上円了学会第4回学術大会*13

日時：平成27年9月13日

場所：東洋大学白山キャンパス8号館7階125記念ホール

発表者：

甲田烈「世界の際としての「妖怪」」

菅原潤「哲学館事件と綱島梁川」

白井雅人「井上円了の平和哲学と戦争哲学」

ライナ・シュルツァ「井上円了における「方便」概念」

堀雅通（東洋大学）「井上円了の観光行動について」

特別講演：

アグスティン・ハシント＝サバラ「教育勅語の解釈としての井上円了の『中等修身書』」

1-5-3. 国際講演会・国際会議

- ・東洋大学国際哲学研究センター・東国大学校仏教大学共同研究「近代における日韓両国仏教の変遷」春期セミナー*8

日時：平成27年7月11日

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

場所：東洋大学白山キャンパス 8 号館 7 階 125 記念ホール

プログラム：

開会挨拶

竹村牧男

姜文善（慧源スニム）

佐藤厚「近代朝鮮仏教界における海外情報の摂取—1910 年代を中心として」

金光植（東国大学校仏教大学、卍海思想研究所）「韓国近代仏教「帯妻肉食」の二元的路線—日本仏教受容に対する賛否の事例」

三浦節夫「井上円了の妖怪学」

金浩星「倉田百三の親鸞理解について—「歎異抄講評」を中心として」

竹村牧男「鈴木大拙と西田幾多郎」

姜文善（慧源スニム）「近代期の韓国禅院の芳躰録に表れた修行文化」

質疑・応答及び討論

- ・東洋大学国際哲学研究センター・東国大学校仏教大学共同研究、秋期セミナー*9

日時：平成 27 年 11 月 19 日

場所：韓国東国大学校（ソウル）

プログラム：

竹村牧男「近代日本仏教における戒律復興運動の 2, 3 の動向について」

朴仁成「遍行心所觸に対する深浦正文の解釈」

三浦節夫「井上円了と清沢満之」

姜文善「1920～1940 年代、日本の朝鮮仏教復興運動とその様相——中村健太郎、『朝鮮生活 50 年』を中心に——」

佐藤厚「『朝鮮仏教総書』刊行計画——1920 年代朝鮮における幻のプロジェクト」

高榮燮「雷虚 金東華の仏教認識——宇井伯壽と関連して」

2. 第 2 ユニット

2-1. 平成 23 年度

2-1-1. 研究会

7 月 25 日 第 1 回研究会：坂井多穂子（研究員）「白居易の戯題詩」*15

10 月 24 日 第 2 回研究会：沼田一郎（研究員）「インド古代法研究における方法論的試論」*21

11 月 28 日 第 3 回研究会：大野岳史（研究員）「対話形式の著述とスピノザ」*15

1 月 23 日 第 4 回研究会：清水高志（研究員）「ミシェル・セールの『生成』を読む」*15

2 月 16 日 第 5 回研究会：黒田昭信（客員研究員）「西田哲学の方法論」（第 1 ユニット・第 2 ユニット合同）*15

2 月 20 日 第 5 回研究会：黒田昭信「テキストの地層学序説」*15

2-1-2. 研究集会・講演会

- ・第 2 ユニット研究集会*15

日時：平成 23 年 11 月 1 日

場所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 4 階文学部会議室

発表者：ゲオルグ・シュテンガー（ウィーン大学）「間文化現象学の方法論」

2-1-3. 国際講演会・国際会議

- ・第 1 回 WEB 国際会議「普遍方法論の可能性——デカルトとフッサール——」*16

日時：平成 23 年 10 月 15 日

場所：東洋大学白山キャンパス 5 号館 4 階特別会議室

発表者：

ドゥニ・カンブシュネル（パリ第一大学）「いま、デカルトによるマテーシス」

ゲオルグ・シュテンガー「フッサールの現象学の「明証性」という見解についての注解」

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

コメンテーター：村上勝三（研究員）、山口一郎（研究員）、大西克智（客員研究員）、稲垣諭（研究員）

・国際講演会「ポスト福島哲学 知の巨匠に尋ねる」*19

日時：平成 23 年 12 月 17 日

場所：東洋大学白山キャンパス 5 号館地下 2 階井上円了ホール

発表者：

ジャン＝リュック・ナンシー（ストラスブール大学名誉教授）「フクシマの後で哲学すること」

ベルンハルト・ヴァルデンフェルス（元ボーフム大学）「為しえることと為しえないこと」

コメンテーター：西谷修（東京外国語大学）、山口一郎

2-2. 平成 24 年度

2-2-1. 研究会

4 月 23 日 第 1 回研究会：村上勝三「デカルト形而上学の方法としての「省察 meditatio」について」*15

7 月 9 日 出張報告会：山口一郎「ドイツにおける「価値」と「学問」を巡る諸問題」

2-2-2. 研究集会・講演会

7 月 4 日 第 1 回「ポスト福島哲学」講演会：ジャン＝ピエール・デュピュイ（スタンフォード大学）「破局的な状況を前にした合理的選択」、一ノ瀬正樹（東京大学）「放射能問題の被害性——哲学は復興に向けて何を語るか」*19

9 月 22 日 第 2 回「ポスト福島哲学」講演会：エティエンヌ・タッサン（パリ第七大学）「フクシマは今！ エコロジー的危機の政治哲学」*19

10 月 6 日 第 3 回「ポスト福島哲学」講演会「避難者支援をめぐる」：吉野裕之（子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク）、木田裕子（母子疎開支援ネットワーク「hahako」／支援ねっと@みえきた）、疋田香澄（子どもたちの健康と未来を守るプロジェクト／母子疎開支援ネットワーク「hahako」）*19

10 月 19 日 第 4 回「ポスト福島哲学」講演会：鎌仲ひとみ（映画監督）「『内部被ばくを生き抜く』をめぐる」*19

3 月 12 日 第 5 回「ポスト福島哲学」講演会：高橋哲哉（東京大学）、村上勝三*19

2-2-3. シンポジウム

・シンポジウム「〈法〉概念の時間と空間——〈法〉の多様性とその可能性を探る」*22

日時：平成 24 年 12 月 15 日

場所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 2 階 6217 教室

発表者：

鈴木賢（北海道大学）「中国的法概念の特殊性について——非ルールの法、政治用具性をめぐる」

沼田一郎「古代インドにおける倫理と社会規範——ダルマ（dharma）と〈法〉概念の接点」

堀井聡江（桜美林大学）「イスラームにおける法の概念」

堀内俊郎（研究助手）「仏教における法概念の多様性——思想的観点から——」

葛西康徳（東京大学）「古代ギリシアにおける法（Nomos）の概念について——とくに立法および立法者に焦点を合わせて」

2-2-4. 国際講演会・国際会議

・第 2 ユニット WEB 国際会議「哲学の方法としての直観と反省」*16

日時：平成 24 年 10 月 13 日

場所：東洋大学白山キャンパス 5 号館 4 階特別会議室

発表者：

ジョスラン・ブノワ（パリ第一大学）

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

岡田光弘 (慶應義塾大学)
 黒田昭信
 山口一郎
 コメンテーター：ゲオルグ・シュテンガー

2-3. 平成 25 年度

2-3-1. 研究会

- 6月19日 第1回研究会：呉正嵐「明代中後期における文人の経学と文学思想との関係について」*15
 10月5日 第3回「ポスト福島哲学」研究会：納富信留（慶應義塾大学）「理想を論じる哲学——ポスト福島の今、何を語るか」*19
 12月14日 第4回「ポスト福島哲学」研究会：山口祐弘（客員研究員）「核時代の生——哲学・思想からの提言」*19
 2月21日 第5回研究会：竹中久留美（PRA）「ヒュームと唯名論」*15
 3月1日 第6回研究会：河本英夫（研究員）「方法としてのオートポイエーシス」*15

2-3-2. 研究集会・講演会

- 6月14日 特別講義：呉正嵐「六朝江東の士族文学発展と変化」
 5月17日 第6回「ポスト福島哲学」上映会・講演会：上映『第4の革命 エネルギーデモクラシー』、[講演者] 高橋真樹（ノンフィクションライター）*19
 7月26日 第7回「ポスト福島哲学」講演会：加藤和哉（聖心女子大学）「ぼくら、アトムのこどもたち 1962～1992～2011」*19

2-3-3. シンポジウム

- ・シンポジウム「ポスト福島哲学：風化と闘う技術」*19
 日時：平成 25 年 11 月 30 日
 場所：東洋大学白山キャンパス 9 号館 2 階第 4 会議室
 開会あいさつ：村上勝三
 岩田渉（CRMS 市民放射能測定所）「フクシマの記念碑化」
 武藤類子（福島原発告訴団団長）「福島原発告訴団のこれまでとこれから」
 司会：村上勝三
- ・国際シンポジウム「〈法〉の移転と変容」*23
 日時：平成 26 年 1 月 11 日
 場所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 2 階「6210 教室」
 主催者あいさつ：沼田一郎
 長谷川晃（北海道大学）「異法融合の秩序学——〈法のクレオール〉の視座から」
 岡孝（学習院大学）「明治民法起草過程における外国法の影響」
 浅野宜之（大阪大谷大学）「インド文化と近代法」
 桑原尚子（高知短期大学）「イスラーム法と政治」
 シマ・アヴラモヴィッチ（ベオグラード大学）「セルビア法—ローマ・ビザンツとオーストリアの伝統のあいだで」
 二宮正人（サンパウロ大学）「19 世紀におけるブラジルの独立および共和制移行後における法典化」
 総合討論 司会：沼田一郎
- ・方法論シンポジウム「中世哲学における非アリストテレス的なもの ～ヨーロッパとイスラーム～」*15
 日時：平成 26 年 3 月 8 日
 場所：東洋大学白山キャンパス 8 号館 M2 第 2 会議室
 山内志朗（慶應義塾大学）「西洋中世における神学の方法と体系化——ロンバルドゥス『命題集』への註解をめぐって」

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

竹下政孝（東京大学名誉教授）「中世イスラームにおける『諸学問の分類』と体系化の思想」
司会 村上勝三

2-3-4. 国際講演会・国際会議

- ・WEB 国際会議「合理主義者と経験主義者による哲学の方法についての対話」*16
日時：平成 25 年 10 月 12 日
場所：東洋大学白山キャンパス 8 号館 7 階特別会議室
エドゥアール・メール（ストラスブール大学）「外的世界の理念性の問題」
ヘレン・ビービー（マンチェスター大学）「ヒュームの帰納的懐疑論」
コメンテーター：村上勝三、一ノ瀬正樹、大西克智
司会：山口一郎

2-4. 平成 26 年度

2-4-1. 研究会

- 4 月 19 日 「方法論」研究会①：山口祐弘（客員研究員）「ドイツ観念論の課題と方法—近代哲学の超克に向けて—」*15
- 5 月 30 日 「ポスト福島哲学」①研究会：堀切さとみ（ドキュメンタリー映像作家）「映画『原発の町を追われて～避難民・双葉町の記録』上映会および講演会」*19
- 6 月 21 日 「方法論」研究会②：渡辺博之「スピノザの「方法」について」*15
- 9 月 27 日 「ポスト福島哲学」②研究会：西谷修「技術とカタストロフィ」*19
- 10 月 25 日 第 2 ユニット研究会・白山哲学会共催「村上勝三先生最終講義：超越の方法—デカルトの途」
- 1 月 5 日～10 日 「ポスト福島哲学」展示「ポスト・フクシマ・インスタレーション」：[設計デザイン] 大崎晴地（アーティスト）*19
- 2 月 17 日 方法論研究会③「方法の越境性、あるいは越境の方法」検討会：村上勝三、沼田一郎、坂井多穂子、[司会] 武藤伸司（研究助手）*17
- 3 月 16 日 「方法論」研究会④：ゲオルグ・シュテンガー「間文化哲学—方法論の内と外」*15

2-4-2. シンポジウム

- ・方法論シンポジウム「方法の越境性、あるいは越境の方法」*17
日時：平成 26 年 7 月 2 日
場所：東洋大学白山キャンパス 8 号館 M2 階第 2 会議室
村上勝三「デカルト哲学研究の技法について—技法の共有からネットワークの構築へ」
沼田一郎「インド学・インド哲学について」
坂井多穂子「「方法の越境性、あるいは越境の方法」——中国古典文学の場合——」
司会：武藤伸司
- ・「ポスト福島哲学」③シンポジウム：「原発事故後のエネルギーと本当の豊かさ」シンポジウム「ポスト福島哲学：原発事故と食の現状」*19
日時：平成 26 年 11 月 22 日
場所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 3 階 6302 教室
高田久代（国際環境 NGO グリーンピース・ジャパン）「日本全国、稼働原発ゼロ 1 年——でんきのこれからを、みんなでつくる」
村上真平（「なないろの空」代表）「未来に向けて、私たちが望む本当の豊かさとは」
総合討論：[司会] 村上勝三
- ・方法論シンポジウム「哲学の方法としての翻訳の意義」*38
日時：平成 27 年 2 月 28 日
場所：東洋大学白山キャンパス 2 号館 16 階スカイホール
発表者：神崎繁（専修大学）、中畑正志（京都大学）
特定質問：土橋茂樹（中央大学）

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

司会：村上勝三

2-4-3. 国際講演会・国際会議

- ・WEB 国際会議「理性と経験—スピノザ哲学の方法—」*16

日時：平成 26 年 10 月 11 日

場所：東洋大学白山キャンパス 8 号館 7 階特別会議室

講演者：ピエール-フランソワ・モロー（フランス高等師範学校リオン校）「理性と経験—スピノザ哲学の方法について」

特定質問 1：大西克智

特定質問 2：渡辺博之

特定質問 3：藤井千佳世（日本学術振興会特別研究員）

司会：村上勝三

2-5. 平成 27 年度

2-5-1. 研究会

- 5 月 30 日 「哲学史のドクサを問う—〈合理論と経験論〉の再検討—」連続研究会①：藤坂大佑（東洋大学大学院博士課程）「ジェイムズ思想展開における「合理論・経験論」の対立軸の考察」*15
- 6 月 20 日 「哲学史のドクサを問う—〈合理論と経験論〉の再検討—」連続研究会②：笠松和也（東京大学大学院博士課程）「経験と理性の間で——スピノザ哲学における「目的」と「欲求」」*15
- 7 月 7 日 「ポスト福島哲学」研究会①：オバーク・アンドリュウ（研究員）「自然災害と予知不可能な死：私たち自身の死について考えるためのよい方法はあるのか」*19
- 7 月 20 日 「哲学史のドクサを問う—〈合理論と経験論〉の再検討—」連続研究会③：寅野遼（PRA）「真理と歴史—スピノザ『神学・政治論』第 7 章における「聖書解釈の真なる方法」について—」*15
- 8 月 1 日 方法論研究会「「種の論理」の可能性」：黒田昭信「集合的個体概念の論理的分析—「種の論理」の問題群の明確化のために—」、立花史（早稲田大学）「死の時代」の学芸共和国——詩の翻訳と読解における田邊の社会存在論」、特定質問：合田正人（明治大学）*15
- 10 月 17 日 現象学研究会「現象学の方法論および学問論—学際的哲学研究としての間文化哲学の展開に向けて—」連続研究会①：山口一郎（IRCP 客員研究員）「学際的哲学としての神経現象学の方法論」*15
- 10 月 26 日 「哲学史のドクサを問う—〈合理論と経験論〉の再検討—」連続研究会④：渡辺博之（IRCP 客員研究員）「スピノザにおける「合理主義」と「経験」について」、竹中久留美（東洋大学非常勤講師）「「ない」という指摘の視点—ヒュームの場合—」*15
- 11 月 7 日 方法論研究会フランス出張報告：大西克智（IRCP 客員研究員）「日仏デカルト研究会・2(Descartes : la morale de la metaphysique)を終えて——方法論研究の基盤と今後」*15
- 12 月 5 日 方法論研究会第 2 回「現象学の方法論および学問論——学際的哲学研究としての間文化哲学の展開に向けて—」：稲垣諭（IRCP 客員研究員）「臨床経験と現象学」、武藤伸司（IRCP 客員研究員）「現象学研究における本質直観の重要性を改めて問う」*15
- 12 月 12 日 「哲学史のドクサを問う—〈合理論と経験論〉の再検討—」連続研究会⑤：野村智清（東京大学助教）「大陸合理性とイギリス経験論—アノマリーとしてのアイルランド哲学」、大野岳史（IRCP 研究員）「『ポール・ロワイヤル倫理学』の観念論における感覚と想像」*15
- 1 月 23 日 方法論研究会第 3 回「現象学の方法論および学問論——学際的哲学研究として

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

の間文化哲学の展開に向けて一」：武内大（IRCP 客員研究員）「魔術的想像力の現象学」＊15

1月26日 「哲学史のドクサを問うー〈合理論と経験論〉の再検討ー」連続研究会⑥：藤坂大佑、笠松和也、寅野遼、竹中久留美、渡辺博之、大野岳史、野村智清「Our Next Steps (Our Next Step)」＊15

2-5-2. 〈研究集会・講演会〉

- ・「ポスト福島哲学」講演会＊19

日時：平成27年11月14日

場所：東洋大学白山キャンパス5号館1階5104教室

講演者：加藤典洋（早稲田大学名誉教授）「フィードバックと生体系、コンティンジェンシー、リスクと贈与——『人類が永遠に続くのではないとしたら』、次の問いへの手がかり」

2-5-3. 国際講演会・国際会議

- ・東洋大学国際哲学研究センター共催日仏合同研究会「デカルトと形而上学の道 村上勝三退職記念」（フランス、パリ第一大学、2015年9月19日）

【午前の部】

開会挨拶：ドゥニ・カンブシュネル

津崎良典（IRCP 客員研究員）「省察と判断の形成」

フレデリック・ルロン「他性と出会い、第一哲学から道徳へ」

大西克智（IRCP 客員研究員）「選ぶこと：デカルト的選択について」

ピエール・ゲナンシア「誤りと自由意志：道徳と形而上学の交差」

討論

【午後の部】

ドゥニ・カンブシュネル「形而上学における抑制について」

村上勝三「デカルト形而上学と道徳の基礎」

フレデリック・ド・ビュゾン「物理学なしの道徳？」

全体討論

閉会の挨拶

3. 第3ユニット

3-1. 平成23年度

3-1-1. 研究会

7月22日 第1回研究会：長島隆（研究員）「ドイツにおける自然療法と近代医学—自然治癒説と人工治癒説をめぐって」＊32

10月28日 第2回研究会：堀内俊郎「仏教における共生の基盤の可能性としての「捨（upekṣā）」」＊29

12月20日 第3回研究会：三澤祐嗣「スィク教に見られる共生思想—インド研究調査報告」＊29

2月20日 第4回研究会：脇田道子（慶応義塾大学大学院博士課程）「辺境のツーリズム—ブータンの近代化と牧畜民ブコクパのアイデンティティの行方」＊29

2月28日 第5回研究会：村松聡（早稲田大学文学学術院教授）「リベラリズムの自己理解『負荷なき自己』の限界とコミュニタリアニズムの自己像—サンデルとマッキンタイアの場合」、長島隆「チャールズ・テイラー、コミュニタリアニズムの基本テーゼと〈近代〉理解」＊32

3-1-2. 海外研究調査・研究集会

- ・「インド・パンジャブ州アムリットサル市を中心にした、中世ヒンドゥー教改革者ナーナクの共生思想研究及びスィク教聖地の現地調査と資料収集」＊29

日時：平成23年9月16日～26日

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

場所：インド：パンジャーブ州アムリットサル
 該当者：橋本泰元（研究員）、三澤祐嗣（PRA）

3-2. 平成 24 年度

3-2-1. 研究会

- 5月23日 第1回研究会：バフマン・ザキプール（東洋大学大学院博士課程）「大乘仏教とイラン人との関係—パルティア人から黎明の叡智へ—」*29
- 7月4日 第2回研究会：宮本万里（MINDAS）「ブータン——「幸福社会」という国づくり」*29
- 10月3日 第3回研究会：ジャヤンドラ・ソーニー（インスブルック大学）「インド哲学史におけるいくつかの観点の間文化的な妥当性」*29
- 10月25日 第4回研究会：矢内義顕（早稲田大学）「アンセルムスの思想における『共生』」*32
- 10月31日 第5回研究会：石田安実（横浜市立大学非常勤講師）「プラシーボ効果から見た心身関係」*32
- 11月22日 研究報告会：宮本久義（研究員）・堀内俊郎・三澤祐嗣「ブータンにおける多文化共生研究集会・現地調査」報告会*29
- 3月28日 第6回研究会：末永恵子（福島県立医科大学）「人体の思想史的意味—「死体」の思想史構築に向けて—」・松島哲久（大阪薬科大学）「フランス哲学における心身問題と生命観」*32

3-2-2. シンポジウム

- ・国際シンポジウム「共生の哲学に向けて—イスラームとの対話—」*25

日時：平成 24 年 11 月 6 日

場所：東洋大学白山キャンパス 2 号館 16 階スカイホール

発表者：

アブドッラヒーム・ギャヴァーヒー（世界宗教研究センター）「イスラームと神道の対話：文化的理解と協力のために」

森瑞枝（国学院大学非常勤講師）「本居宣長の「漢意」批判について」

ダヴード・フェイラーヒー（テヘラン大学）「現代イスラーム：御言葉と学問の間」

黒田壽郎（元国際大学）「イスラームと共存の可能性—仏教との比較の観点から」

ビジャン・アブドルカリミー（イラン・イスラーム自由大学）「比較哲学の重要性と必要性」

鎌田繁（東京大学）「他者との共生とイスラーム」

ハッサン・サイード＝アラブ（Encyclopedia Islamica Foundation）「コルバンとスフラワルディー：イラン・イスラームと現代哲学との対話」

小野純一（客員研究員）「スフラワルディー：純粹現象としての東洋」

ビジャン・アブドルカリミー（イスラム・アザド大学）「ハイデガーに触発されたアンリ・コルバンの洞察」

永井晋（研究員）「アンリ・コルバンの現象学」

3-2-3. 国際講演会・国際会議

- ・「ブータンにおける多文化共生研究集会・現地調査」*30

日時：平成 24 年 8 月 24 日～30 日

場所：ブータン王国

該当者：

宮本久義、永井晋、橋本泰元、堀内俊郎、三澤祐嗣、斎藤明（客員研究員）、井上忠男（客員研究員）、Lopen Sonam Bomden、Lopen Gempo Dorji（ブータン中央僧院）

3-3. 平成 25 年度

3-3-1. 研究会

- 6月21日 特別講義：アジャ・リンポチェ師（チベット・モンゴル仏教文化センター所長）

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

- 「空と智慧」*29
- 7月25日 第1回研究会「身体と精神の共生」研究会：丸橋裕（兵庫県立大学）「痛みの生命論—V・v・ヴァイツゼカーの医学的人間学を導きとして」*32
- 12月12日 第2回研究会：「共生の哲学に向けて—「イランにおける多文化共生研究集会・現地調査」—報告会」*29
- 12月17日 第3回研究会「哲学と宗教①」：マルクス・ガブリエル（ボン大学）“Die Ontologie der Prädikation in Schellings Die Weltalter” *32
- 12月18日 特別講義「哲学と宗教②」：マルクス・ガブリエル “Die Zeitphilosophie in Schellings Weltaltern” *32

3-3-2. シンポジウム

- ・国際シンポジウム「共生の哲学に向けて—言語を通じて古代アジアの人々の価値観を探る—」*29

日時：平成25年6月22日

場所：東洋大学白山キャンパス8号館7階125記念ホール

基調講演：

アジャ・リンポチェ師「All Living Beings Can Co-Exist Using Their Own Language Systems」

発表者：

後藤敏文（東北大学名誉教授）「インド・アーリヤ諸部族の背景とインド文化，そして現代」

斎藤明（客員研究員）「仏教思想は甦るか—仏典、翻訳、そして現代—」

- ・シンポジウム「宗教間の共生は可能か」*29

日時：平成25年11月30日

場所：東洋大学白山キャンパス6号館2階6210教室

開会あいさつ：渡辺章悟

釈悟震（(財)中村元東方研究所）「異宗教間の共存は可能か—仏教国スリランカを中心に—」

バイカル（客員研究員）「モンゴル帝国時代の仏教とキリスト教—カラコルムの宗教弁論大会を中心として」

菅野博史（創価大学）「富永仲基と平田篤胤の仏教批判」

総合討論 司会：渡辺章悟

閉会あいさつ：宮本久義

- ・シンポジウム「共生思想としての神仏習合」*29

日時：平成25年12月22日

場所：東洋大学白山キャンパス6号館1階6102教室

開会あいさつ：永井晋（研究員）

門屋温（いわき明星大学非常勤講師）「牛を殺さないために—神仏習合が神道を再生する」

鎌田東二（京都大学）「『神と仏の出逢う国』再考」

末木文美士「神仏を哲学する」

総合討論 司会：永井晋

閉会あいさつ：宮本久義

- ・「哲学と宗教③」シンポジウム「哲学と宗教—シェリング Weltalter を基盤として」*32

日時：平成25年2月22日

場所：東洋大学白山キャンパス6号館2階6207教室

菅原潤（長崎大学）「悪論と神話論のあいだ—シェリング『世界の年代』(Weltalter)の射程」

岡村康夫（山口大学）「シェリングにおける哲学と宗教について」

永井晋（研究員）「ユダヤ神秘主義の問題—カバラーの論理」

小野純一（客員研究員）「シェリングとイスラーム」

総合討論 司会：長島隆

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

3-3-3. 海外研究調査・研究集会

- ・海外研究「イランにおける多文化共生研究集会・現地調査」（テヘラン・シーラーズ・イスファハーン・ヤズド、2013年10月29日～11月6日）＊29
- ・研究集会「イランと日本の間の思想的共生の必要性」＊26
 日時：平成25年11月5日
 場所：イラン・アカデミーサイエンス
 開会あいさつ：宮本久義（研究員）・Ayatollah Seyyed Mostafa Mohaghegh Damad 博士
 Gholamreza Avani, “Rethinking Philosophy in an Oriental Way”
 永井晋（研究員）「西田幾多郎と近代日本の哲学—「東洋哲学」とは何か—」
 Abdolrahim Gavahi “Cultural Coexistence: A Product of Cultural Understanding and Interaction”
 堀内俊郎「初期仏典に学ぶ共生の知恵」
 コメント：小野純一（客員研究員）
 ペルシア語への通訳：バフマン・ザキプール（東洋大学大学院博士課程）
- ・現地調査「ミャンマーにおける多文化共生の実態を探る」＊31
 日時：平成26年2月28日～3月4日
- ・現地調査「アメリカにおける多文化共生」＊31
 日時：平成26年3月20日～3月31日

3-4. 平成26年度

3-4-1. 研究会

- 5月27日 出張報告会：山村（関）陽子（PD）「自然・人間・社会の共生のために」＊32
- 7月5日 連続研究会「文字化された宗教教典の形成とその意味—多文化共生を図るツールを考える—」第一回目：園田稔（京都大学名誉教授）「神社縁起の形成と現在」、宮家準（慶應義塾大学名誉教授）「修験道の教典形成と天台宗—『溪嵐拾葉集』と『寺門伝記補録』を通して」＊29
- 7月12日 研究会「自然との共生」：江藤匠（東洋大学非常勤講師）「イタリア古典期の肖像画におけるフランドル絵画の影響について—レオナルド・ダ・ヴィンチの作例を中心に」＊32
- 7月26日 研究会「自然との共生」：金子智太郎（東京藝術大学）「同調の技法——デヴィッド・ダンのサイト-スペシフィック・ミュージック」、コメンテーター：伊東多佳子（客員研究員）＊32
- 10月18日 連続研究会「文字化された宗教教典の形成とその意味—多文化共生を図るツールを考える—」第二回目：榎本文雄（大阪大学）「初期仏典の形成と異宗教との共存」、堀内俊郎「『楞伽経』の形成と、その外教批判に見る多文化共生への智慧」＊29
- 10月21日 連続研究会「文字化された宗教教典の形成とその意味—多文化共生を図るツールを考える—」第三回目：松田和信（佛教大学）「インドから中央アジアへ—インド語出土写本から見たバーミヤンの仏教—」＊29
- 10月22日 連続研究会「多文化共生を考える」第1回「オーストリアにおける多文化共生研究集会・出張報告会」：宮本久義（研究員）「ヒンドゥー教聖地における共生の問題」、渡辺章悟（研究員）「大乘経典における慈悲と憐愍」、堀内俊郎「『楞伽経』における外教の涅槃観批判—仏教的観点からの多文化共生哲学の構築に向けて」＊29
- 11月19日 連続研究会「多文化共生を考える」第2回：菊地章太（研究員）「教会に門松を立ててよいか—イエズス会のアジア布教における衝突・妥協・融合」、井上忠男（客員研究員）「危機に立つ人道～共生社会の普遍的価値と赤十字運動」＊29
- 1月21日 連続研究会「多文化共生を考える」第3回：曾田長人（研究員）「レッスingの

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

- 3月18日 宗教思想」、バフマン・ザキプール（東洋大学大学院博士後期課程）「現代イランにおける諸宗教の共生の実」*29
 連続研究会「多文化共生を考える」第4回：小野純一（客員研究員）「イスラームとテロリズム」；渡辺章悟、堀内俊郎「京都・奈良の宗教行事に見る多文化共生の実態の調査および僧侶からのインタビュー調査」出張報告*29

3-4-2. シンポジウム

- ・シンポジウム「精神性に与える瞑想の効果」*29

日時：平成26年11月29日

場所：東洋大学白山キャンパス8号館7階125記念ホール

開会あいさつ：渡辺章悟

番場裕之（日本ヨーガ光麗会）「ヨーガ派の瞑想～一境集中への架け橋～」

蓑輪顕量（東京大学）「上座仏教と大乘仏教の瞑想—その共通性」

ケネス田中（客員研究員）「アメリカにおけるマインドフルネス・ブーム—現代社会への影響とその意義」

総合討論 司会：渡辺章悟

閉会あいさつ：宮本久義

- ・国際シンポジウム「共生の哲学に向けて：イラン・イスラームとの対話—井筒俊彦の共生哲学—」*27

日時：平成26年12月13日

場所：東洋大学白山キャンパス5号館井上円了記念ホール

【第1部：講演】

開会あいさつ：村上勝三

駐日イラン大使あいさつ：レザー・ナザルアーハリ駐日イラン・イスラーム共和国特命全権大使

アブドッラヒーム・ギャヴァーヒー（元駐日イラン大使、世界宗教センター）「グローバル化時代における文化交流についてのいくつかの考察」

カーゼム・ムーサヴィー・ボジュヌールディー（グレート・イスラミック・エンサイクロペディア・センター）「イランにおける百科事典編纂に関する一考察」

——特別展示会「イラン文化のゆうべ」——

【第2部：シンポジウム「井筒俊彦の共生思想」】

エフサン・シャリーアティー（元テヘラン大学）「現代の「イラン的イスラーム」哲学におけるコルバンと井筒の役割に関する導入的比較研究：ハイデガーからマシニョンまで」

ナスロッラー・プールジャヴァーディー（元テヘラン大学）「井筒俊彦のイラン神秘主義哲学に対する関心」

コメント：竹下政孝（東京大学名誉教授）

総合討論 司会：永井晋

閉会あいさつ：宮本久義

3-4-3. 海外研究調査・研究集会

- ・海外出張「オーストリアにおける多文化共生海外研究」*29

日時：平成26年8月17日～8月25日

3-5. 平成27年度

3-5-1. 研究会

- 5月7日 連続研究会「多文化共生を考える」第5回目：橋本泰元「異宗教間の〈境界〉と〈共生〉」、永井晋「共生の形而上学」*29

- 5月9日 書籍「多文化共生を考える」のための座談会：[司会]菊地章太、鼎談者末木文美士、斎藤明、鎌田東二（客員研究員）*29

- 5月23日 新実在論研究会①：長島隆「新実在論の運動について—モーリス・フェラーリ、

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

マルクス・ガブリエル、そして分析哲学―」、中島新（一橋大学大学院博士課程）
「シェリングとマルクス・ガブリエル―新實在論を巡って―」 *32

3-5-2. シンポジウム

・シンポジウム「多文化共生を考える」：「多元的価値社会と徳倫理再生の試み―多元的価値観に基づく社会で、共通の徳、倫理的規範を考えることは可能か？―」 *32

日時：平成 27 年 6 月 20 日

場所：東洋大学白山キャンパス 5 号館 1 階 5102 教室

村松聡「一リベラリズムの寛容さ（クレメニティア）では解決できない問題の提起―」

岩田圭一（早稲田大学文学学術院）「倫理的知の可能性―ソクラテスとアリストテレス―」

堀内俊郎「無我に基づく共生の哲学―初期仏教からみた他者や他宗教との共生―」

吉村均（(公財) 中村元東方研究所・専任研究員、東洋大学非常勤講師）「空の理解と対話―
伝統仏教からみた憲法十七条の「和」の精神」

山口一郎「フッサール現象学からみた徳の概念」

司会：堀内俊郎

・「シェリング・シンポジウム」 *32

日時：平成 27 年 8 月 1 日

場所：東洋大学白山キャンパス 6 号館 4 階 6406 教室

長島隆「歴史哲学の可能性―『過去』と体系」

菅原潤（日本大学）「体系的過去としての『世界年代』―第三稿の読解および『世界年代の
体系』との関係」

岡村康夫（山口大学）「シェリング哲学の躰き」

総合討論：[司会]長島隆

・第 2 回「瞑想シンポジウム―精神性に与える瞑想の効果」 *29

日時：平成 27 年 10 月 3 日

場所：東洋大学白山キャンパス 2 号館 16 階スカイホール

羽矢辰夫（青森公立大学）「瞑想の目的とその効用」

K. プラボンサック（龍谷大学非常勤講師）「タイ仏教の瞑想法―心の曇りを晴らし、内なる
光を取り戻す」

永澤哲（京都文教大学）「21 世紀の瞑想の脳科学と自己変容のパラダイム」

総合討論：[司会]渡辺章悟

・国際シンポジウム「グローバル化時代の哲学」 *32

日時：平成 27 年 12 月 11 日

場所：東洋大学白山キャンパス 5 号館 B1 階 5B12 教室

開会あいさつ（永井晋）

マルクス・ガブリエル「グローバル哲学？（Globale Philosophy?）」

ハンス・スルガ「グローバルパワー、グローバル政治、グローバル哲学（Globale Macht,
globale Welt, globale Philosophie）」

総合討論（司会：永井晋、通訳：小野純一）

閉会あいさつ

3-5-3. 海外研究調査・研究集会

・海外研究：国際サンスクリット学会参加ならびに、タイ・ダンマカーヤとの多文化共生共同
研究 *31

日時：平成 27 年 6 月 26 日～7 月 3 日

該当者：宮本久義、渡辺章悟、堀内俊郎

・海外研究：イランとの共同研究ならびに多文化共生現地調査 *28

日時：平成 27 年 9 月 11 日～9 月 17 日

該当者：永井晋、宮本久義、小野純一、堀内俊郎

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

4. 全体シンポジウム

4-1. 平成 23 年度

設立記念シンポジウム「哲学の国際化は可能か」*1

日時：平成 23 年 12 月 10 日

場所：東洋大学白山キャンパス 2 号館 16 階スカイホール

基調講演：加藤尚武（京都大学名誉教授）「哲学の国際化は可能か」

パネル発表：

吉田公平「哲学は国際化できるか」

山口一郎「国際哲学研究の課題と可能性－諸々の生活世界を源泉にする哲学としての国際哲学－」

菊地章太「蓄積される罪と罰－古代の道教思想から現代へ」

4-2. 平成 24 年度

東洋大学創立 125 周年記念国際シンポジウム「グローバルな現実に向きあう哲学」*2

日時：平成 24 年 9 月 16 日

場所：東洋大学白山キャンパス 2 号館 16 階スカイホール

発表者：

ジャヤンドラ・ソーニー（インスブルック大学）「ジャイナ教における非暴力の哲学的正当化」

呉震「徳川日本の心学運動における中国的要素について」

エティエンヌ・タッサン「グローバリゼーションの時代における人間の条件」

ケネス・田中「アメリカに浸透する仏教－その現状と意義」

4-3. 平成 26 年度

シンポジウム「国際化とは何をすることなのか－東洋大学国際哲学研究センターの「これまでとこれから」－」*3

日時：平成 26 年 9 月 24 日

場所：東洋大学白山キャンパス 5 号館 4 階 5404 教室

開会あいさつ：村上勝三

第 1 ユニット【日本哲学の再構築に向けた基盤的研究】

三浦節夫「井上円了研究の国際化に向けて」

岩井昌悟「近代日本哲学を問い直す」

第 2 ユニット【東西哲学・宗教を貫く世界哲学の方法論研究】

村上勝三「方法論研究・ポスト福島哲学」

沼田一郎「〈法〉概念研究－〈法〉の多様性とその可能性を探る」

第 3 ユニット【多文化共生社会の思想基盤研究】

宮本久義「アジアにおける多文化共生社会」

永井晋「イラン・イスラームにおける多文化共生思想」

全体討論 司会：相楽勉

閉会あいさつ：宮本久義

4-4. 平成 27 年度

国際シンポジウム「22 世紀の世界哲学に向けて」*4

日時：平成 27 年 10 月 10 日

場所：東洋大学白山キャンパス 8 号館 7 階 125 記念ホール

基調講演

ゲオルグ・シュテンガー「間文化哲学の現状と課題」

シンポジウム

相楽勉「日本における「哲学」受容の独自性－「自然」概念をてがかりに－」

永井晋「世界哲学におけるイランという視座」

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

総合討論

5. インターネットでの公開

以上の成果についてはすべて下記センターホームページにて公開している

平成 23 年 10 月 13 日：日本語版ホームページ立ち上げ (<http://www.toyo.ac.jp/rc/ircp/>) *35

平成 23 年 12 月 14 日：英語版ホームページ立ち上げ (http://www.toyo.ac.jp/rc/ircp_e/) *35

平成 24 年 9 月 18 日：国際井上円了学会ホームページ立ち上げ
(<http://www.toyo.ac.jp/site/iair/>)

平成 25 年 3 月：井上円了データベース公開 (<http://www.ircp.jp/>) *12

平成 25 年 4 月 1 日：ホームページ改訂 (<http://www.toyo.ac.jp/site/ircp/index.html>)

研究会及びシンポジウムの一部の動画については、下記チャンネルにて公開している
(<http://www.youtube.com/channel/UCT6X7t4kvpkJNI1LOC-f4Vw>) *35

内訳：研究会 33 本

シンポジウム 7 本

WEB 会議 7 本

平成 25 年 3 月発行：『国際井上円了研究』第 1 号

(<http://www.toyo.ac.jp/site/iair-e/publication-gakkai01.html>) *14

平成 26 年 3 月発行：『国際井上円了研究』第 2 号

(<http://www.toyo.ac.jp/site/iair-e/50751.html>) *14

平成 27 年 3 月発行：『国際井上円了研究』第 3 号

(<http://www.toyo.ac.jp/site/iair-e/69280.html>) *14

平成 28 年 3 月発行：『国際井上円了研究』第 4 号

(<http://www.toyo.ac.jp/site/iair-e/89933.html>) *14

<これから実施する予定のもの>

14 その他の研究成果等

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

<「選定時」に付された留意事項>

ユニット 2 の内容が理解しにくい。また、ユニット 3 については、東西哲学の比較研究だけで、解析できるか説明されたい。

<「選定時」に付された留意事項への対応>

中間評価時に次の通りの回答を行った。

第 2 ユニットに関しては、「留意事項」を、具体的方策が理解しにくいという意味に解し、以下のように対応した。第 2 ユニットは世界哲学を構築するための方法論の開発を目指している。「方法」概念についての日仏独哲学者との共同討論、哲学の基本概念である「反省」、「直観」についての日仏独の哲学者との共同討論を行った。また 25 年度には経験論と合理論の方法的な差異を明確にするための WEB 研究会を開催する。これらの経験の上に立って、世界哲学を構築するための普遍的方法、及び、体系形成の方法を探究するとともに、WEB を利用した国際講演会・研究会によるさまざまな国の哲学者との交流の実践的な方法を確立する予定である。

第 3 ユニットに関しては、第 3 ユニットの研究テーマ調書には「東西哲学の比較研究」という文言ないし趣旨は記されていないので、第 2 ユニットのテーマと混同されていると推察する。第 3 ユニットは国や地域、あるいは人間が作り出した文化の中に存在する多様性を探り、評価し、画一的な価値観や体制に陥らない方途を見出し、提言することである。これまでに行ってきたインドやブータン、イランの多文化共生研究もその線上にあり、今後もさらにそれを深く追究していく予定である。

上記回答に対し、次の通りの評価を得た。

留意事項にあった「第 2 ユニットの内容が理解しにくい」についての疑問はまだぬぐえない。ポスト福島の哲学という主題と、東西の哲学を架橋する方法論の構築の話は質的に異なるように思われる。

この評価に対して次の通りに返答する。

方法論の構築にあたって 2 つのアプローチを行っている。それは普遍性と個別性である。これらは単なる東西哲学の比較ではなく、共通の議論の場を形成し、普遍の知を模索し、それらを個別的に適用する、あるいは、個別的な研究から出発し、その中から普遍の知を探るというものである。その具体的な一例として、クロスセクションの技法の開発を行った。また、共通の議論の場を構築するために行われた WEB 国際会議は、その好例である。さらに、「ポスト福島の哲学」は哲学的アプローチ＝普遍化と実践的活動＝個別化という相互の連携を模索した方法論のモデルケースである。あるいは言い換えるなら理論と実践の連携ともいえるのである。

<「中間評価時」に付された留意事項>

該当なし。

<「中間評価時」に付された留意事項への対応>

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1191005

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他()	
平成23年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	30,000	19,980	10,020				
平成24年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	43,998	29,228	14,770				
平成25年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	38,000	26,294	11,676				
平成26年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	33,999	23,965	10,034				
平成27年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	31,969	23,327	8,642				
総額	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	0	0	0	0	0	0	0
	研究費	177,966	122,794	55,142	0	0	0	0
総計		177,966	122,794	55,142	0	0	0	0

17 施設・装置・設備の整備状況（私学助成を受けたものはすべて記載してください。）
 《施設》（私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。）（千円）

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
国際哲学研究センター	23	45	2	51	0	0	

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

0 m²

《装置・設備》（私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。）（千円）

装置・設備の名称	整備年度	型 番	台 数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)				h			
				h			
				h			
				h			
(研究設備)				h			
				h			
				h			
				h			
(情報処理関係設備)				h			
				h			
				h			
				h			

18 研究費の支出状況（千円）

年 度	平成 23 年度		積 算 内 訳	
小 科 目	支 出 額	主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	1,350	消耗品費	1,350	文具・PC関連消耗品等購入費
通 信 運 搬 費	112	通信運搬費	112	資料発送代
印 刷 製 本 費	2,403	印刷製本費	2,403	年報・ニュースレター等作成経費
旅 費 交 通 費	2,281	研究旅費	2,281	国内外への調査等出張経費
報 酬 ・ 委 託 料	7,131	報酬費・業務委託費	7,131	講演謝礼・評価委員謝礼・翻訳業務委託等
会 合 費	474	会合費・懇親会費	474	研究会飲料代・シンポジウム懇親会費
図 書 資 料 費	2,837	書籍代	2,837	研究関連書籍・資料代
そ の 他	2	学会参加費	2	学会参加費
計	16,590		16,590	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人 件 費 支 出 (兼務職員)	51	事務補助・シンポジウム補助	50	時給900円、年間時間数 50時間 実人数 2人
教 育 研 究 経 費 支 出				
計	51		50	
設 備 関 係 支 出 (1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教 育 研 究 用 機 器 備 品	1,138	教育研究用機器備品費	1,138	研究用PC購入費等
図 書				
計	1,138		1,138	
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	2,757	研究補助	2,757	学内3人
ポスト・ドクター	9,464	研究補助	9,464	学内3人(研究助手(専任、平成22年7月1日採用))
研究支援推進経費				
計	12,221		12,221	学内6人

法人番号	131070
------	--------

(千円)

年 度	平成 24 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	1,593	消耗品費	1,593
通 信 運 搬 費	578	通信運搬費	578
印 刷 製 本 費	2,249	印刷製本費	2,249
旅 費 交 通 費	7,886	研究旅費	7,886
報 酬 ・ 委 託 料	8,266	報酬費・業務委託費	8,266
会 合 費	1,301	会合費・懇親会費	1,301
図 書 資 料 費	4,605	書籍代	4,605
そ の 他	112	学会参加費	112
計	26,590		26,590
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人 件 費 支 出 (兼務職員)	1,197	事務補助・シンポジウム補助	1,197
教育研究経費支出 計	1,197		1,197
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品 図 書	498	教育研究用機器備品	498
計	498		498
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	3,228	研究補助	3,228
ポスト・ドクター	12,485	研究補助	12,485
研究支援推進経費 計	15,713		15,713

(千円)

年 度	平成 25 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	1,000	消耗品費	1,000
通 信 運 搬 費	900	通信運搬費	900
印 刷 製 本 費	1,800	印刷製本費	1,800
旅 費 交 通 費	5,800	研究旅費	5,800
報 酬 ・ 委 託 料	6,500	報酬費・業務委託費	6,500
会 合 費	600	会合費・懇親会費	600
図 書 資 料 費	3,500	書籍代	3,500
そ の 他	200	学会参加費、利用料	200
計	20,300		20,300
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人 件 費 支 出 (兼務職員)	1,200	事務補助・シンポジウム補助	1,200
教育研究経費支出 計	1,200		1,200
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品 図 書	500	教育研究用機器備品	500
計	500		500
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	2,500	研究補助	2,500
ポスト・ドクター	13,500	研究補助	13,500
研究支援推進経費 計	16,000		16,000

年 度	平成 26 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	1,238	消耗品費	1,238
通 信 運 搬 費	739	通信運搬費	739
印 刷 製 本 費	2,162	印刷製本費	2,162
旅 費 交 通 費	4,240	研究旅費	4,240
報 酬 ・ 委 託 料	6,881	報酬費・業務委託費	6,881
会 合 費	645	会合費・懇親会費	645
図 書 資 料 費	513	書籍代	513
そ の 他	332	学会参加費、利用料	332
計	16,750		16,750
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	931	事務補助・シンポジウム補助	931
教育研究経費支出			
計	931		931
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品		教育研究用機器備品	
図 書			
計	0		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	2,722	研究補助	2,722
ポスト・ドクター	13,596	研究補助	13,596
研究支援推進経費			
計	16,318		16,318

年 度	平成 27 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	1,779	消耗品費	1,779
通 信 運 搬 費	480	通信運搬費	480
印 刷 製 本 費	2,380	印刷製本費	2,380
旅 費 交 通 費	3,210	研究旅費	3,210
報 酬 ・ 委 託 料	6,929	報酬費・業務委託費	6,929
会 合 費	326	会合費・懇親会費	326
図 書 資 料 費	97	書籍代	97
そ の 他	257	学会参加費、利用料	257
計	15,458		15,458
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	1,347	事務補助・シンポジウム補助	1,347
教育研究経費支出			
計	1,347		1,347
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	0	教育研究用機器備品	0
図 書			
計	0		0
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	2,432	研究補助	2,432
ポスト・ドクター	12,732	研究補助	12,732
研究支援推進経費			
計	15,164		15,164